目　　次

◆船橋市内の指定文化財…… 2
◆船橋市内の登録有形文化財…… 3
◆例言・文化財の体系図…… 3

＜国史跡＞
No.1　取掛西貝塚…… 4
＜県指定文化財＞
No.2　西福寺石造五輪塔…… 6
　　西福寺石造宝篋印塔…… 7
No.3　木造蔵王権現三尊立像…… 8
No.4　木造五智如来坐像…… 9
No.5　南蛮胴具足
　　附　兜、籠手、佩楯、臑当…… 11
No.6　天正検地帳…… 12
No.7　灯明台…… 13
No.8　小室の獅子舞…… 14
No.9　下総三山の七年祭り…… 15
No.10　明治天皇船橋行在所…… 17
＜市指定文化財＞
No.11　二宮神社社殿…… 18
No.12　難陀龍王堂…… 19
No.13　清川コレクション（特選）…… 20
No.14　石造自休大徳坐像…… 22
No.15　木造地蔵菩薩坐像…… 23
No.16　木造毘沙門天立像…… 24
No.17　木造観世音菩薩立像…… 25
No.18　木造阿弥陀如来立像…… 27
No.19　木造聖観世音菩薩立像…… 29
No.20　木造稲荷神立像…… 31
No.21　船橋浦漁業関係古文書類…… 32
No.22　成瀬家文書…… 34
No.23　板碑（弘安九年七月十五日在銘）…… 35
No.24　板碑（康永四年二月在銘）…… 36
No.25　瑞花双鳳五花鏡・梅花文鏡筥（残欠）…… 37
No.26　齋藤その女等奉納句額…… 39
No.27　徳川家康寄進状、徳川将軍朱印状
　　附　東照大権現像、葵紋箱…… 40
No.28　八十八ヶ所札所大絵馬（能満寺）…… 42
No.29　八十八ヶ所札所大絵馬（観行院）…… 42
No.30　梯子乗りと木遣り歌…… 44
No.31　大仏追善供養…… 45
No.32　神保ばやし…… 46
No.33　船橋大神宮の神楽…… 47
No.34　二宮神社の神楽…… 48
No.35　高根町神明社の神楽…… 49
No.36　飯山満町大宮神社の神楽…… 50
No.37　中野木の辻切り…… 51
No.38　観信の墓　附　木造地蔵菩薩坐像…… 52
No.39　俳人齋藤その女の墓…… 53
No.40　船橋御殿跡　附　東照宮…… 54
No.41　葛羅の井…… 55
No.42　鐘楼堂跡　附　和時計　蜀山人筆…… 56
No.43　習志野地名発祥の地
　　附　明治天皇駐蹕之処の碑…… 58
No.44　成瀬氏の墓　附　墓誌…… 59
No.45　飛ノ台貝塚…… 61
No.46　下野牧二和野馬土手…… 62
No.47　葛飾神社のクロマツ…… 63
No.48　二宮神社のイチョウ…… 64
＜国登録有形文化財＞
No.49　東葉高等学校正門
　　（旧近藤家住宅長屋門）…… 65

◆船橋市の歴史…… 66
◆船橋市の略年表…… 70
◆付録資料

船橋市内の指定文化財

区分	No.	種別	名称	員数	所在地又は伝承地	所有者等	指定年月日	頁
国	1	史跡	取掛西貝塚		飯山満町1－1382－2ほか	船橋市・個人	R 3.10.11	4
県	2	有建	西福寺石造五輪塔	1基	宮本6－16－1	西福寺	S42.12.22	6
			西福寺石造宝篋印塔	1基				7
	3	有彫	木造蔵王権現三尊立像	3躯	前原東5－43－1（御嶽神社）	千葉県指定文化財蔵王権現保存会	S33. 4.23	8
	4	有彫	木造五智如来坐像	5躯	西船3－3－4	正延寺	H 5. 2.26	9
	5	有工	南蛮胴具足 附 兜、籠手、佩楯、臑当	1領 1式	市内	個人	H20. 3.18	11
	6	有古	天正検地帳	1冊	西船1－20－50（船橋市西図書館）	船橋市	S57. 4. 6	12
	7	有民	灯明台	1基	宮本5－2－1	意富比神社（船橋大神宮）	S37. 5. 1	13
	8	無民	小室の獅子舞		小室町	小室獅子講	S39. 4.28	14
	9	無民	下総三山の七年祭り		船橋市・千葉市 八千代市・習志野市	七年まつり保存會	H16. 3.30	15
	10	史跡	明治天皇船橋行在所		本町3－3－4	千葉銀行	S 9.12.18	17
市	11	有建	二宮神社社殿	1棟	三山5－20－1	二宮神社	H 4. 2.27	18
	12	有建	難陀龍王堂	1棟	本町3－24－6	覚王寺	H 7. 3.28	19
	13	有絵	清川コレクション（特選）	8点	湊町2－10－25	船橋市	H17. 7.25	20
	14	有彫	石造自休大徳坐像	1躯	古和釜町365（東光寺）	古和釜町石仏保存会	S40. 3.17	22
	15	有彫	木造地蔵菩薩坐像	1躯	飯山満町2－744－1	ゆるぎ地蔵保存会	S40. 3.17	23
	16	有彫	木造毘沙門天立像	1躯	大神保町282	西福寺	S41. 2.22	24
	17	有彫	木造観世音菩薩立像	1躯	藤原3－2－18	藤原堂	S41. 2.22	25
	18	有彫	木造阿弥陀如来立像	1躯	海神1－17－16（念仏堂）	念仏堂世話人	S42. 3.20	27
	19	有彫	木造聖観世音菩薩立像	1躯	夏見6－23－3	長福寺	S46. 3. 5	29
	20	有彫	木造稲荷神立像	1躯	市内	個人	S53.10.25	31
	21	有古	船橋浦漁業関係古文書類	一括	西船1－20－50（船橋市西図書館）	船橋市	S47.12.21	32
	22	有古	成瀬家文書	一括	市内	個人	S63. 7.22	34
	23	有考	板碑（弘安九年七月十五日在銘）	1基	大神保町282	西福寺	S41. 2.22	35
	24	有考	板碑（康永四年二月在銘）	1基	薬円台4－25－19（船橋市郷土資料館）	個人	S51. 3.31	36
	25	有考	瑞花双鳳五花鏡 梅花文鏡筥（残欠）	1面 1点	薬円台4－25－19（船橋市郷土資料館）	船橋市	H17. 7.25	37
	26	有歴	齋藤その女等奉納句額	1面	三山5－20－1	二宮神社	S55.10.23	39
	27	有歴	徳川家康寄進状、徳川将軍朱印状 附 東照大権現像、葵紋箱	1式	宮本5－2－1	意富比神社（船橋大神宮）	H25. 7.19	40
	28	有民	八十八ヶ所札所大絵馬	1面	飯山満町1－581	能満寺	S57. 3.31	42
	29	有民	八十八ヶ所札所大絵馬	1面	高根町1226	観行院	S57. 3.31	43
	30	無民	梯子乗りと木遣り歌		市内	船橋鳶職組合　若鳶会	S44. 4.17	44
	31	無民	大仏追善供養		本町3－4－6（不動院）	船橋市漁業協同組合	S47.12.21	45
	32	無民	神保ばやし		神保町（須賀神社）	神保ばやし保存会	S54. 7.28	46
	33	無民	船橋大神宮の神楽		宮本5－2－1	船橋大神宮楽部	H 7. 6.26	47
	34	無民	二宮神社の神楽		三山5－20－1	二宮神社神楽はやし連	H 7. 6.26	48
	35	無民	高根町神明社の神楽		高根町600	高根町神明社神楽連	H 7. 6.26	49
	36	無民	飯山満町大宮神社の神楽		飯山満町2－843	大宮神社神楽楽人	H 7. 6.26	50
	37	無民	中野木の辻切り		中野木1丁目	中野木町会	H 9. 4.24	51
	38	史跡	観信の墓　附　木造地蔵菩薩坐像		薬円台1－1（高幢庵）	木っぱ地蔵保存会	S40. 3.17	52
	39	史跡	俳人齋藤その女の墓		大穴北5－3－1	西光院	S40. 3.17	53
	40	史跡	船橋御殿跡　附　東照宮		本町4－29－12	本町4丁目町会	S40. 3.17	54
	41	史跡	葛羅の井		西船6－4－5	葛羅の井保存会	S40. 3.17	55
	42	史跡	鐘楼堂跡　附　和時計　蜀山人筆		宮本7－7－1	了源寺	S41. 2.22	56
	43	史跡	習志野地名発祥の地 附　明治天皇駐蹕之処の碑		薬円台4－25－19（船橋市郷土資料館）	船橋市	S43.12.19	58
	44	史跡	成瀬氏の墓　附　墓誌		西船6－2－30	宝成寺	S45. 5.20	59
	45	史跡	飛ノ台貝塚		海神4－260－1ほか	船橋市	H 9. 5.16	61
	46	史跡	下野牧二和野馬土手		二和東1－367－18	市内	H29.12.28	62
	47	天然	葛飾神社のクロマツ	1樹	西船5－3－8	葛飾神社	H24. 3.30	63
	48	天然	二宮神社のイチョウ	1樹	三山5－20－1	二宮神社	H24. 3.30	64

船橋市内の登録文化財

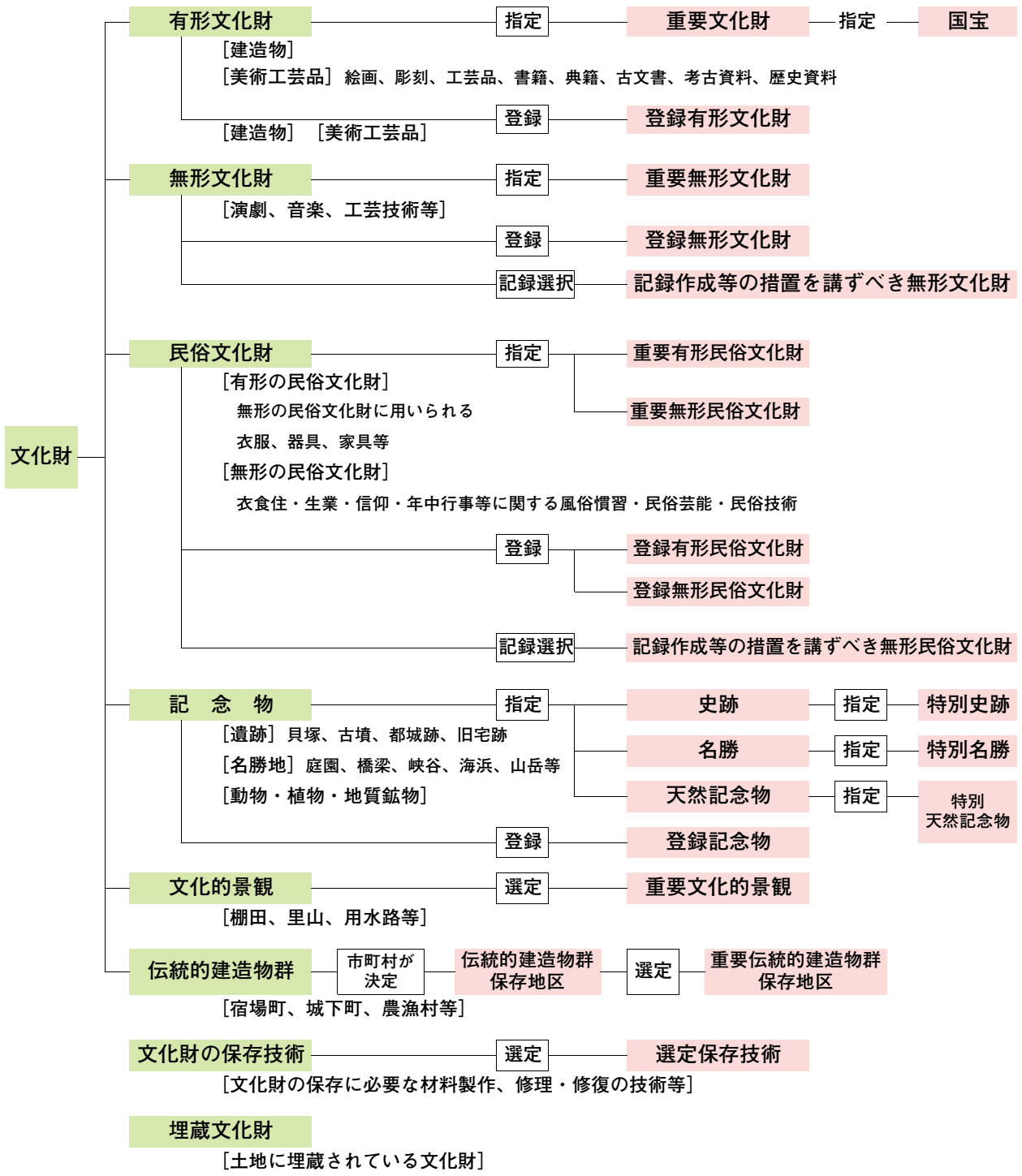
区分	No.	種別	名　　称	員数	所　在　地	所　有　者	登録年月日	頁
国	49	有建	東葉高等学校正門 (旧近藤家住宅長屋門)	1棟	飯山満町2－670－1	学校法人船橋学園	H13. 4.24	65

※種別略記

有建　＝　有形文化財（建造物）　　有絵　＝　有形文化財（絵画）　　有彫　＝　有形文化財（彫刻）
有工　＝　有形文化財（工芸品）　　有古　＝　有形文化財（古文書）　　有考　＝　有形文化財（考古資料）
有歴　＝　有形文化財（歴史資料）　　有民　＝　有形民俗文化財　　無民　＝　無形民俗文化財

本書に掲載している指定及び登録文化財は、令和５年３月31日現在、市内に存するものです。

文化財保護の体系図



取掛西貝塚（とりかけにしかいづか）

所在地　　船橋市飯山満（はさま）町１丁目1382番２ほか

所有者　　船橋市、個人

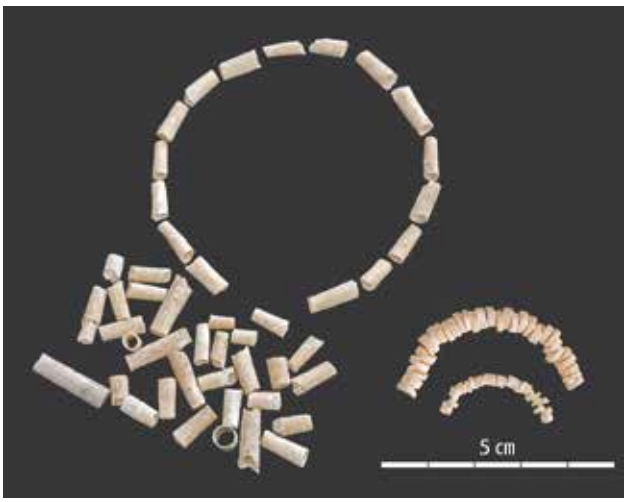
約１万年前の貝層断面と動物骨集中

取掛西貝塚は、船橋市飯山満町１丁目から米ケ崎（こめがさき）町にまたがる、標高約25mの台地上に立地する縄文時代の遺跡で、面積は約76,000㎡（東京ドーム約1.6個分）である。発掘調査の結果、約１万年前（縄文時代早期前葉）と約６千年前（縄文時代前期前半）の、２つの時期の貝塚を伴う集落跡（ムラ）が見つかっている。

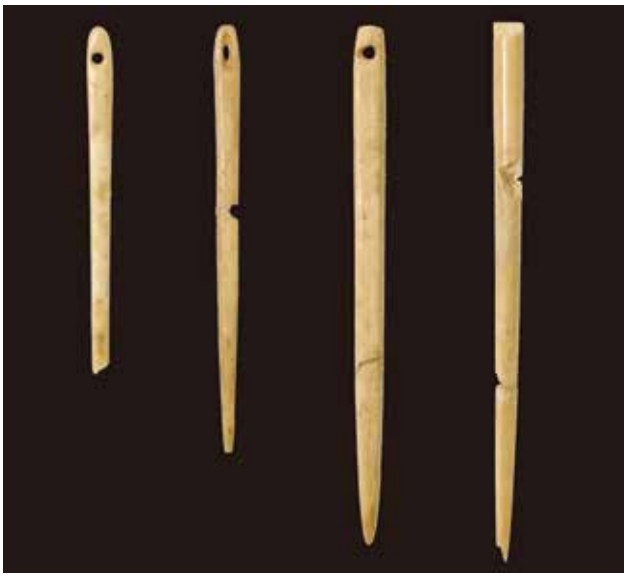
約１万年前には、グローバルな気候温暖化や縄文海進といった大きな環境変化に対応して、貝塚がはじめて形成され、定住的な新しい生活様式が確立した。約１万年前の貝塚は日本列島で最古段階の貝塚であり、全国的にみても10か所程度と非常に数が少ない。また、本貝塚では同時期の竪穴住居跡が58軒発見されており、ムラと貝塚の両方が残された早期前葉の貝塚として稀有な遺跡である。これらの竪穴住居は、台地南部を中心に東西約300ｍの範囲に分布しており、本貝塚は早期前葉の集落として関東最大規模である。さらに約６千年前の気候の最温暖期のムラと貝塚も残されており、環境の変動とそれに適応した日本列島の人類史を解明することができる重要な遺跡である。

船橋市を含む東京湾東岸部は、日本列島で約2,700か所ある縄文貝塚のうち、およそ30％の約760か所が集中する日本一の貝塚密集地帯として知られ、特別史跡加曽利貝塚（かそりかいづか）などの日本を代表する大型貝塚が数多く形成されている。その中で本貝塚は最古段階の貝塚であり、この地域や日本列島で貝塚が形成されはじめた時期の環境や人々の生活･文化を知る上で欠かせない重要な遺跡であるとして、令和３年10月に本市初の国史跡に指定された。

遺跡東部で見つかった早期前葉の竪穴住居跡には約70ｃｍの厚さの貝層が堆積していた。これは、竪穴住居が使われなくなった後に、住居跡の窪みに縄文人が食料のゴミである貝殻や骨などを捨てたもので、貝層の中にはイノシシ・シカ・タヌキ・ノウサギなどの哺乳類のほか、キジ類・カモ類などの鳥類、コイ科・クロダイ・ボラ科・スズキ・イワシ類などの魚類の骨が豊富に残っていた。縄文人が食料とした魚介類のうち、貝類は99％以上が河口など淡水と海水が混じりあう汽水域に生息するヤマトシジミであるのに対して、魚類は淡水域から内湾沿岸部にかけて生息するものがみられ、より広い水域で漁がおこなわれたことが窺われる。



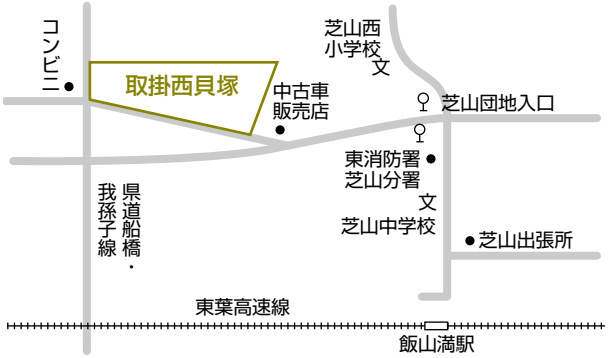
ツノガイ製ビーズ


骨製針

さらに、出土した炭化種実や土器に残された種実の痕跡（圧痕）を詳しく調べた結果、オニグルミなどの堅果類、ミズキなどの漿果類（水分が多く果肉が柔らかい果実）、ダイズ属やアズキ亜属などのマメ類を利用していたことが判明した。また、貯蔵した木の実などを食害するコクゾウムシの圧痕も見つかり、食料が乏しい時期を見越して、あらかじめ木の実などを貯えていたと考えられ、定住性の高い生活であったことが窺われる。本貝塚では、縄文人が使っていた土器や石器のほか、針や刺突具など骨でつくった道具も出土している。このほか、貝殻を素材として作られた装飾品（ビーズなど）も見つかった。なかでもツノガイという貝で作られたビーズは2,000点以上あり、縄文時代の他の遺跡と比べても突出した量である。また、竪穴住居跡の貝層の下から、イノシシやシカの頭蓋骨を集めて火を焚いた跡がみつかっている。単に食料のゴミを捨てただけとは考えにくい出土状況であり、当時の人々の精神文化を考えるヒントとして大変重要である。

（案内）

東葉高速線飯山満駅から徒歩約20分。
JR船橋駅北口または東船橋駅からバスで
「雄鹿野」「芝山団地入口」「うぐいす園前」
下車徒歩約10分。
※現地は大部分が個人所有の畑地や宅地ですので、見学の際は、生活している方の迷惑にならないよう、ご配慮願います。



西福寺石造五輪塔　1基

所在地　船橋市宮本6丁目16番1号
所有者　西福寺

五輪塔は平安時代中期から供養塔・墓塔として造られるようになった塔の一種で、石造のものが多い。中世には石塔の主流となり、近世以降も造られている。塔は五つの部分からできている。これらは、仏教で宇宙を構成すると考えられている五つの要素（地・水・火・風・空）を形に表したもので、基礎から順に、地輪・水輪・火輪・風輪・空輪と呼ぶ。

各輪に一字ずつ梵字が刻まれている場合が多い。

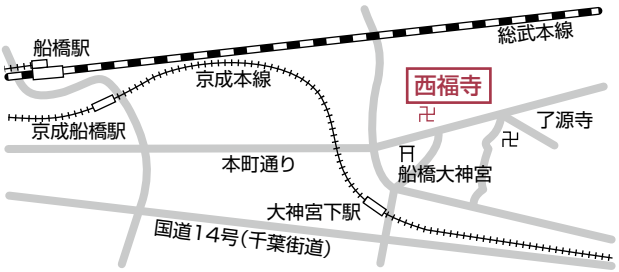
西福寺の五輪塔は、銘文は刻まれていないが、鎌倉時代後期頃の製作と推定されている。（南北朝時代の製作とする説もある。）総高は295cmで、中世の五輪塔の中では大型のものである。材質は安山岩で、空輪の先端をわずかに欠いているが、他の部分は原形を残している。火輪が厚く、水輪・地輪の低い安定した姿で、火輪の軒の反りが垂直に近い。

大和西大寺叡尊塔や鎌倉極楽寺忍性塔の流れをくむ優れた作の五輪塔で、その古風さ、優美な姿に特色がある。なお、この五輪塔と次ページの宝篋印塔については、御殿地（本町４丁目）から移したという伝承がある。移築の年代は江戸時代初期の船橋御殿造成時の可能性が高い。もとあった場所については不明だが、このような大規模な石塔が建立されていた大きな寺院、あるいは館があった可能性は考えられる。また、両塔を公家伏原宣條と船橋則賢の墓とする説もあるが、年代が合わないので疑問である。

（案内）

ＪＲ船橋駅から徒歩約17分。
京成電鉄大神宮下駅から徒歩約６分。

※次ページの石造宝篋印塔も同じ場所にあります。



西福寺石造宝篋印塔　1基

所在地　船橋市宮本6丁目16番1号
所有者　西福寺

宝篋印塔の起源は、中国の呉越（五代十国）の王、錢弘俶がインドの釈迦供養塔にならって作った銅・鉄製の金塗塔であるとされてきたが、その錢弘俶塔の手本であった鄮県の阿育王塔こそ祖型であるとする説もある。平安時代中期に日本にも伝来し、中に「宝篋印陀羅尼経」が納められていたことから宝篋印塔と呼ばれる。日本では、鎌倉時代中期に石造のものが出現し、五輪塔とならんで中世石塔の主流となり、近世には一部形を変えて存続した。

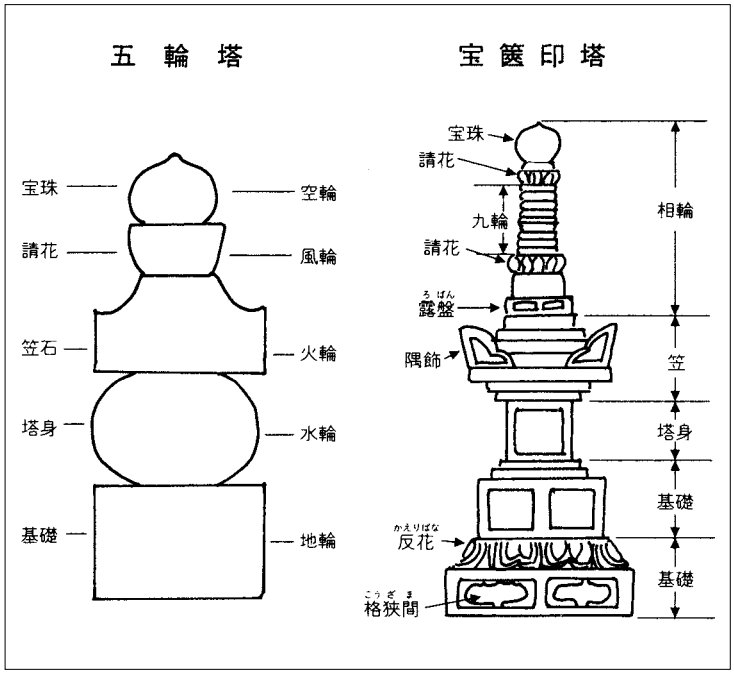
この宝篋印塔は安山岩製で、格狭間のある下の基礎から露盤までの高さは約154cm、中世のものとしては大型である。

相輪部は後補だが、ほかの部分は原形をよく残しており、優れた作品である。基礎は側面を二つに分け、それぞれに格狭間をつけているところに特色が見られる。銘文は刻まれていないが、その造りなどから、鎌倉時代後期の製作と推定される。

昭和56年（1981）にこの宝篋印塔や先頁の五輪塔の沈下埋没の修復工事が行われた際、宝篋印塔の下から鎌倉時代の常滑焼の蔵骨器（壺）二口と、小形の五輪塔の一部が出土した。壺には二つとも、中にわずかな火葬骨が納められ、山砂が詰まっていた。

この両塔には御殿地にあったものを現在の場所に移したという伝承があり、これらを裏付けるものと考えられる。

宝篋印塔（左）と五輪塔（右）



木造蔵王権現三尊立像

所在地　船橋市前原東5丁目43番1号　御嶽神社

管理者　千葉県指定文化財蔵王権現保存会

この蔵王権現は、前原の鎮守御嶽神社が蔵王権現と称していた江戸時代に、祭神として祀られていたもので、現在も同所に安置されている。

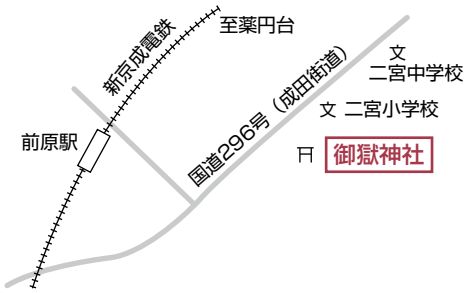
中尊の蔵王権現はヒノキ材で頭体幹部は一材製、内刳りを施している。像高は96cm、忿怒の形相が巧みに表現された重厚な秀作で、制作年代は平安時代後期までさかのぼると推定される。両腕と両足は中世の補作と推定され、玉眼・光背・台座・宝冠などは近世の補作である。片足で立たせるというきわめて不安定なポーズは、内刳りによる像の軽量化が最も効果を発揮している。

両脇侍の童子像はヒノキ材の寄木造、像高はどちらも58cmで鎌倉時代の制作と推定され、落ち着きのある表情をしている。両像とも手首・台座などは後補である。

この三尊像は、前原新田が開墾された延宝年間（1670年代）に、当地の草分けの一人上東野新助が、江戸神田の修験僧林光院釈仙竜ともども前原に迎え、祀ったものと伝えられる。

（案内）

新京成電鉄前原駅から徒歩約10分。



秘仏のため、見学はできません。

蔵王権現　ミニ知識

権現とは仏・菩薩が衆生を救うために権（かり）の姿で現れること。仏が化身して日本の神として現れるという「本地垂迹説」の考え方から生まれた日本独自の神で、山王権現、熊野三所権現、徳川家康を神とする東照大権現などがある。

蔵王権現は修験道の主尊で、伝説によれば、修験道の祖と呼ばれる役行者小角が吉野の金峯山で修行しているとき、人々の救済を願って神仏を呼び出そうとしたところ、最初に釈迦如来、次に千手観音、弥勒菩薩が現れたが、それに満足せずさらに強力な仏の出現を祈ると、最後に現れたのが蔵王権現であったという。

一面三目二臂で、青黒色の顔に降魔調伏の三眼を輝かせ、忿怒の形相を表す。左手は剣印で腰に当て、右手に金剛杵（密教の法具）を持ってふりあげ、右足を上げて躍り上がった姿が一般的で、多くの立像・懸仏や絵画が残されている。

木造五智如来坐像

所在地　船橋市西船３丁目３番４号
所有者　正延寺

無量寿如来　開敷華王如来　大日如来　宝幢如来　天鼓雷音如来

大日如来

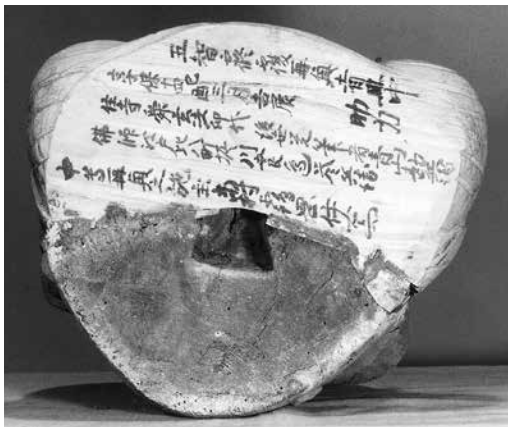
大日如来は、太陽の光をさらに上回る智慧の光明を持つ仏という意味で、密教では最高至上の絶対的な存在と考えられている。密教の中心経典である「大日経」「金剛頂経」の教主であり、それぞれを図示した胎蔵・金剛界曼荼羅の主尊である。５つの「智」を現す五智如来は胎蔵と金剛界の両部にあり、どちらも大日如来と他の４如来の五仏で構成されているが、大日如来の結ぶ印相と４如来の構成がそれぞれで異なっている。五智如来の彫刻は、平安時代の初めころから密教寺院で安置されるようになった。多宝塔などの塔内に安置された例が多い。

正延寺の五智如来像は、中尊が胎蔵大日如来であることと、４如来像のうちの１体が開敷華王如来とみられることから胎蔵五智如来と判定された。材質や構造、作風から、もともと胎蔵五仏として一具同時に作られたものとみられる。

中央の大日如来の像高は59cm、他の４体の如来の像高は41cm前後で、大日如来と如来３体はカヤ材の一木造で両脚部を矧ぎ付けている（如来１体は近代の補作）。像はいずれもずんぐりと丸い体つきで、

修　理　墨　書　銘

無量寿如来の両脚部地付面



大日如来台座の仰蓮裏面

光背の枘裏面

銘文

大日如来の光背枘裏面墨書銘

再興南無五知尊筆者
貞長
本願法印権大僧都舜玄
四十五才夏

大日如来の台座仰蓮裏面墨書銘

旦那中助力も加
三月十九日より四月廿九日
佛師江戸八丁堀与兵衛
享保十四己酉年三月吉辰
後代為披見當村
青山勘兵衛貞長
書之置者也

無量寿如来の両脚部地付面墨書銘

五智覆再興者旦中
助力
住寺舜玄法印代後世覚筆者青山勘兵衛
佛師江戸北八町堀川□邊誉兵衛
中尊再興之施主當村鶴岡伊右兵衛門

本願再奉代玄舜寺住也

小像ながら豊かな量感を保ち、彫りは浅く、丸顔の優しい目鼻立ちをしている。

これらの特徴や構造からみて、10世紀末から11世紀（平安時代）に製作されたものと考えられる。

ただし、大日如来を除く像には、手首先や膝前など後世の修理時に補作された部分があり、印相（いんぞう）も当初のものとは改変されたとみられる。大日如来の台座（だいざ）裏面と如来像の像底に修理銘が墨書されており、享保（きょうほう）14年（1729）に修理されたことがわかる（写真参照）。平成６年（1994）に解体修理を行った際に、胎蔵四仏の印相に復原した。ちなみに胎蔵五智如来は、中尊が大日如来、東方に宝幢如来（ほうとうにょらい）、南方に開敷華王如来、西方に無量寿如来（むりょうじゅにょらい）、北方に天鼓雷音如来（てんくらいおんにょらい）で構成される。

正延寺は、明治41年（1908）に大日山浅間院正覚寺（しょうがくじ）と深堀山地蔵寺延命院（えんめいいん）が合併して成立した寺院で、寺は延命院の跡にある（真言宗豊山派（しんごんしゅうぶさんは））。五智如来坐像はその正覚寺に安置されていたもので、秘仏である。

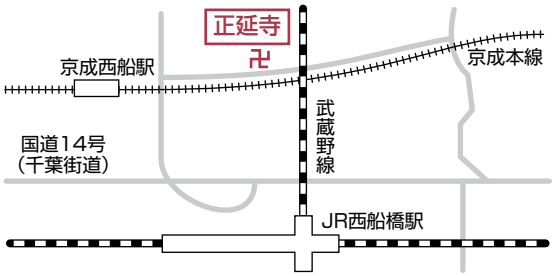
（案内）

ＪＲ西船橋駅から徒歩約10分。
京成電鉄京成西船駅から徒歩約３分。

元日のみ御開帳。

（備考）

平成元年11月27日　船橋市有形文化財指定



南蛮胴具足 附 兜、籠手、佩楯、臑当

所在地　　船橋市内

所有者　　個　人

南蛮胴具足は、ヨーロッパの様式をとりいれて、慶長年間（1596～1615）を中心に鍛造製作されたもので、製作期間が20～30年間に限られており、遺品は久能山東照宮所蔵の徳川家康所用及び東京国立博物館蔵の伝明智左馬介秀満所用等が知られる。

『成瀬系図』によると、慶長19年（1614）の大坂冬の陣で成瀬内蔵助吉正が、加賀藩の武将として真田丸砦を攻めたときにこの南蛮胴具足を着用し、城に向かい馬を馳せた際に城中から鉄砲で撃たれ落馬したが、この具足のおかげで無事であった、とされる。胴の左胸下には、そのときの弾痕が深く残っている。胴の弾痕は鉄砲の試し撃ちをしたものが多いというが、これは実戦のもので珍しい。なお、この具足は吉正が父正一（号は一齊）から譲られたものである。

胴は二枚胴、草摺は青糸威、小田籠手、その他脛当、貫（靴）、指物など一式揃っている。飾りは花模様を鉄片より截り出し、鋲止めした大変精巧なものである。兜は10cm×5cmの鉄板をつなぎ合わせたものである。

南蛮胴の特色は錆地であることと、胴の前面、胸から腰まで真中に縦一筋縞筋をつけ、前へ張り出させたことで、矢石・槍鋒をそらすのに効果があるため、我が国でも間もなくこの様式を模造するようになった。形状が鳩の胸に似ているので「鳩胸胴」とも呼ばれる。県内ではほかに類例をみない。

成瀬吉正は栗原藩（1万6千石）ほかを継いだ成瀬之成の叔父にあたる。また、所有者は加賀藩の成瀬氏の子孫である。

（案内）

個人所有のため、見学する際は事前の連絡が必要です。

（連絡先）船橋市教育委員会文化課　TEL ０４７－４３６－２８８７

（備考）

昭和45年5月20日　船橋市有形文化財指定

天正検地帳

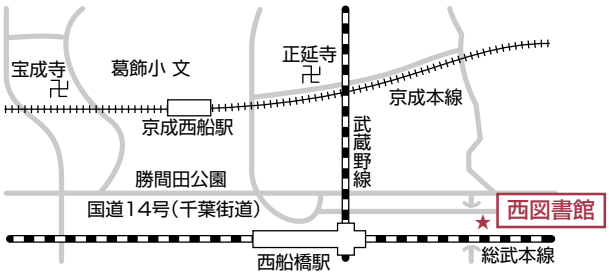
所在地　船橋市西船1丁目20番50号（船橋市西図書館）
所有者　船　橋　市

検地は、領主が支配域の主に耕地と屋敷地を一筆ごとに測量し、土地の等級・面積・生産基準高と所有者を定めることである。検地によって村の範域が確定し、総面積と村高が決定され、それに基づいて租税（年貢）が賦課された。戦国大名や織田信長も部分的な検地を行ったが、全国的な規模で徹底した方式によって行われたのは、豊臣秀吉が天正10年（1582）から実施した『太閤検地』である。これにより、租税の体系と農村の支配体制が確立したといえる。

両総地方の検地は、天正18年（1590）に関東に移封された徳川家康によって天正19年（1591）に着手され、文禄年間（1592～96）から慶長年間（1596～1615）まで継続して行われた。そのうち、慶長3年（1598）までのものは、広義の太閤検地に含まれる。両総地方に残る太閤検地時代の検地帳のうち、天正年間の原本は非常に少ない。そのため、県内の天正検地帳の原本17件（64冊）は、当時の土地の状況、農民や耕作の実態を知る重要な資料として、一括して文化財指定された。

この検地帳は、船橋市立図書館（現在の西図書館）が房総関係資料として収集したものの一つで、現在、市原市に属している山口村の検地帳である。表紙に「天正拾九辛卯八月十六日上総之内佐瀬之郡川田之郷山口村水帳第三」等と書かれている。船橋市と直接かかわる内容ではないが、房総の近世を知るうえで貴重な資料である。

（案内）
ＪＲ西船橋駅から徒歩約５分。
京成電鉄京成西船駅から徒歩約３分。
船橋市西図書館のパソコンで閲覧ができます。
（連絡先）船橋市西図書館
TEL　０４７－４３１－４３８５

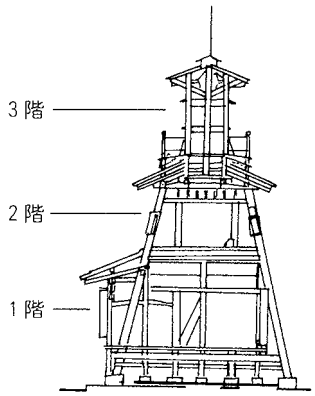


灯明台

所在地　船橋市宮本５丁目２番１号　意富比神社（船橋大神宮）

管理者　船橋大神宮灯明台保存会

灯明台断面図



江戸時代には日本の沿岸航路に沿って簡略な灯明台が設置されていたが、明治時代になると、近代的な西洋式灯台が政府によって新設された。海上交通の発展に伴って灯台の必要性はますます増大し、私設の灯台も各地につくられた。明治初年には一般に灯明台といわれていたが、その後、レンズを使うものを灯台と呼ぶようになった。

この灯明台は、意富比神社（船橋大神宮）の境内にある。当社は古い由緒を誇る船橋市域最大の神社で、古来、特に海運業者や漁師町の漁業者の信仰を集めてきた。船橋沿岸を航行する船は、大神宮境内にあった常夜灯を目印にしていたが、これは慶応４年（1868）の戊辰戦争の際に、社殿とともに焼失してしまった。このため、本格的な灯明台の再建を望む声が高まり、地元有志の寄付金によってつくられたのがこの施設である。明治13年（1880）に完成し、明治28年（1895）に廃止されるまで、政府公認の私設灯台であった。塔の高さは約12ｍあり、元々浅間神社のあった場所に建てられたので、「浅間山灯明台」といった。灯明台は擬洋風建築で、１・２階は和風、３階の灯室は西洋式灯台のデザインを取り入れた六角形のつくりとなっている。光源は石油ランプ３基で、錫製の反射鏡３基を設置し、光の到達距離は約６海里（約11km）、レンズはつけられていないが当時の最新式の設備であった。

１・２階の和室は、点火や見回りの管理人の宿舎として使われていたとみられる。現存の灯明台としては最大規模で、昭和40年（1965）に解体修理、昭和63年（1988）から平成元年（1989）にかけて一部外周の修理が行われた。

（案内）

ＪＲ船橋駅から徒歩約18分。
京成電鉄大神宮下駅から徒歩約４分。

見学する際は、事前の連絡が必要です。
（連絡先）船橋市教育委員会文化課
TEL ０４７－４３６－２８８７

（備考）

平成18年２月「未来に残したい漁業漁村の歴史文化財産百選」（水産庁主催）に認定
平成28年４月　船橋市景観重要建造物に指定

小室の獅子舞

伝承地　　船橋市小室町
伝承者　　小室獅子講

毎年、８月21日の本覚寺の施餓鬼会と八朔の日（現在は9月1日）に、小室町の人達で組織している小室獅子講によって演じられる。由来は不明であるが、古くから、豊作祈願、悪魔払いと疫病退散に効験があると伝えられている。雄獅子、中獅子が雌獅子を取りあって乱舞する一人立ちの三匹獅子舞で、舞い手は獅子頭を頭にのせ、枠無しの締太鼓を腰につけて舞う。舞い手３人、笛３人、唄い手２人、花持ち２人、幕持ち２人で構成され、使われる楽器は笛と舞い手の打つ太鼓だけである。衣装は、雄獅子と中獅子は男柄の襦袢と紫の馬乗り袴、雌獅子は花模様の襦袢と朱の袴を着用し、かつては素足であったが、現在は白足袋をはいて演じる。

舞は、では・うたべい・しほうがため・こしあげ・さあびい・おしあい・けんか・なかなおり・こしあげという構成で伝えられている。施餓鬼会の日には日蓮宗本覚寺の境内で、八朔の日には「アリ（荒）除け」と称して本覚寺と八幡神社、山王社の境内で演じられている。寺と神社とでは歌詞が次のように異なっている。

本覚寺で舞うときの歌詞

大寺の香のけむりは細けれど　天へあがりて　霧雲となる
庭の砂子を踏みわけて　寺へ詣るも　のちの世のため

八幡神社及び山王社の歌詞

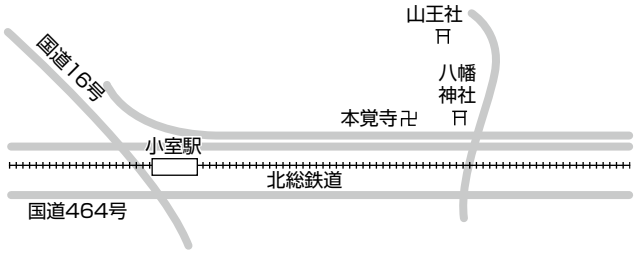
ちはやふる　神の鳥居をくぐりきて　けがれ不浄も　霧雲となる
なりをしずめておききあれ、あまりなるのに　うたがよまれぬ

同様の獅子舞は金堀、大神保、坪井にも伝承されていたが、現在では途絶えてしまっている。その意味でも、伝統を伝える小室の獅子舞は貴重なものである。

雄獅子　　中獅子　　雌獅子

（案内）
北総開発鉄道小室駅から徒歩約６分で本覚寺。
八幡神社は隣接。

（備考）
平成21年以降、中止。現在は獅子頭供養のみ行われている。



下総三山の七年祭り

伝 承 地　船橋市・千葉市・八千代市・習志野市
伝 承 者　七年まつり保存會

安産御礼大祭　二宮神社境内

この祭りは、船橋市・千葉市・八千代市・習志野市から九つの神社が集まる下総地方を代表する寄合祭りである。行事は9月の小祭と11月の大祭からなり、6年ごとの丑年および未年に行われ、数え年で7年ごとになることから七年祭りと呼ばれている。

起源については複数の説があるが、今から550年以上前の室町時代の千葉一族、馬加康胤にまつわる安産祈願と安産御礼の故事に由来する説が有力である。それによると、「文安2年（1445）、千葉一族の馬加康胤の室は懐妊10ヶ月を過ぎても出産の気配がないため、康胤はいたく心配して素加天王社（現子守神社）と二宮神社の神主に祈祷を命じ、安産成就のあかつきには盛大に御礼の祭事を催すと誓った。すると日ならずして男子が誕生したので、康胤は喜悦して領地の村々に触れを廻して盛大な祭事を執り行った。以来、安産祈願と御礼の祭事として連綿と伝えられてきた」とされている。

参加神社と役割　（4市9神社）

二宮神社	船橋市三山	父
子安神社	千葉市花見川区畑町	母
子守神社	千葉市花見川区幕張町	子守
三代王神社	千葉市花見川区武石町	産婆
菊田神社	習志野市津田沼	叔父
大原大宮神社	習志野市実籾	叔母
時平神社	八千代市萱田町・大和田	長男
高津比咩神社	八千代市高津	娘
八王子神社	船橋市古和釜町	末息子

小祭　三山町内を渡御する神輿

下総三山の七年祭りの流れ

［小祭（９月）］

小祭は過去には湯立ての神事で大祭の日を占ったとされ、湯立祭とも呼ばれる。二宮神社だけで行われ、大祭では裏方に徹する三山の寅待会が神輿をかつぎ、１日がかりで三山町内をねり歩く。また神楽殿では、市指定文化財「二宮神社の神楽」が行われる。

禊　　式

［大祭］

大祭1日目の夜には、関係者が二宮神社から徒歩で習志野市の旧鷺沼海岸に出向き、禊式を行い翌日に備え身を清める。

2日目は、「安産御礼大祭」である。各神社の神輿が二宮神社から約600m離れた神揃場に入り、その後各神社の神輿は、順番に七曲りと称する道を通って二宮神社へ向かい、昇殿し、参拝する。

安産御礼大祭　昇殿

安産御礼大祭の後、翌日の未明にかけて二宮・子安・子守・三代王神社により「磯出祭」が行われる。千葉市の旧幕張海岸の式場につくられたオツカに4社の神輿が安置され、満潮の時刻にあわせ、幼い男女がハマグリの交換をする秘儀、産屋の神事が行われる。「磯出祭」は安産を祈願する意味を持つ祭事だが、七年祭りでは先に安産御礼があり、後で安産祈願を行うので、「三山の祭りは後が先」と言いならわされている。

磯出祭の後、式場の北側の路上で、二宮神社の神輿と子安神社の神輿とが別れを惜しむように、神輿の花棒をつける様にしてもむ「別れの儀式」が行われる。

磯出祭の帰りに二宮神社の神輿だけ習志野市鷺沼の神の台（火の口台）と呼ばれる場所に立ち寄り神事を行う。この神事は、祭りの終了を知らせるものと言われている。

大祭の翌日は各神社が花流しと称し、それぞれの神輿をかついで地元の町内をねり歩く。

千葉県下の祭典のなかには、複数の神社の神輿が、海岸などの祭場に集まるものは少なくないが、この下総三山の七年祭りは、そのととのった形態をよく示している。また各所に、日本人の古い信仰形態や、地域の生活に密着した習わしがみられ、多彩な内容を含んだ一大祭事となっている。

（案内）

二宮神社

ＪＲ津田沼駅北口から京成バス二宮神社行きで終点下車。

神揃場

ＪＲ津田沼駅北口から京成バス二宮神社行きで「三山小学校」下車。

（祭り開催中は交通規制が実施されます。）

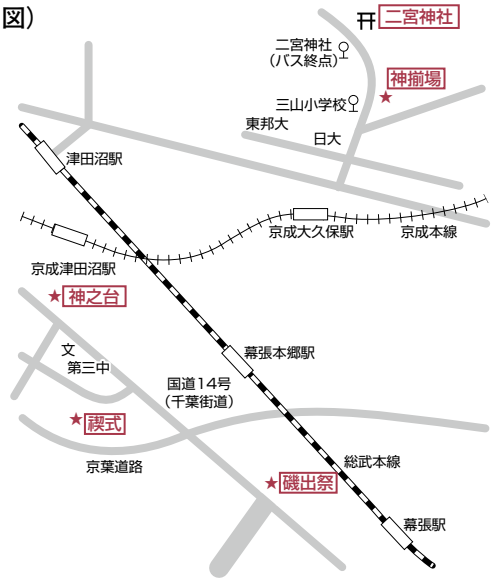
（備考）

平成27年（2015）に開催

※令和３年（2021）は神事のみの開催。

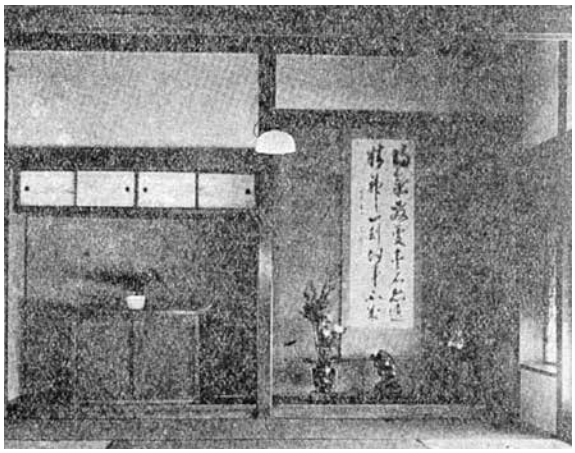
小祭　9月13日　大祭　10月～11月

（案内図）



明治天皇船橋行在所

所在地　船橋市本町３丁目３番４号　千葉銀行船橋支店
所有者　千葉銀行



船橋驛山口丈吉宅に於ける玉座
（『明治天皇御遺跡』より）

明治天皇は、近代的統一国家の形成に力を尽くされたが、陸軍の演習や牧畜耕作事業などをご覧になるため、明治６年（1873）から明治45年（1912）までに計10回、延べ35日間にわたって千葉県に滞在された。

最初のご来県は、明治６年４月29日から５月１日までで、近衛兵の演習をご覧になるために大和田原へお出ましのときである。（大和田原は同年５月13日に天皇のご命令で習志野原と改称された。）

この第１日目に昼食をとられたのが、当時の船橋町九日市の旅館業桜屋、山口丈吉宅（現在の千葉銀行船橋支店の位置）である。その後、明治８年（1875）５月の第２回目のご来県の折には、この山口方に泊まられた。これは本県で最初に民間に宿泊された家である。（第１回目は幕営された。）この後も山口方をしばしばご利用になり、通算して宿泊10回、昼食５回、小休息２回におよび、本県では最も多く立ち寄られている。（明治６年の行幸については58ページ参照）

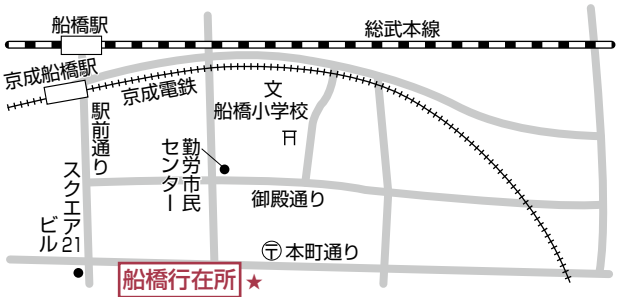
昭和23年（1948）６月29日、明治天皇に関する他の史跡はすべて指定を解除されたが、船橋行在所だけが継続指定されている。

明治天皇船橋行在所の碑

明治天皇の桜屋ご利用回数

明治　6年　4月29日	大和田原近衛兵演習	昼食	明治12年10月26日	習志野原、下志津原	宿泊
〃　　5月　1日	〃	休憩	〃14年　6月28日	下総種畜場	昼食・泊
〃　8年　5月29日	習志野原、下志津原	宿泊	〃　　7月　1日	〃	宿泊
〃　　6月　1日	〃	休憩	〃15年　5月　1日	千葉近衛兵演習	昼食
〃　9年11月16日	習志野原	宿泊	〃　　5月　4日	〃	昼食・泊
〃　　11月17日	〃	宿泊	〃　　6月　5日	下総種畜場	昼食・泊
〃12年10月24日	習志野原、下志津原	宿泊	〃　　6月　8日	〃	宿泊

（案内）
ＪＲ船橋駅から徒歩約10分。
京成電鉄京成船橋駅から徒歩約８分。



二宮神社社殿（にのみやじんじゃしゃでん）

所在地　船橋市三山5丁目20番1号
所有者　二宮神社（にのみやじんじゃ）

社伝によれば、二宮神社の創立は弘仁年間（810～24）であるといわれている。

現在の社殿は棟札や各部の建築様式から安永年間（1772～81）に再建されたものであると考えられます。

社殿は、手前の拝殿と奥の本殿をつなぐ幣殿からなっています。本殿は大正11年（1922）10月に、そして拝殿は大正14年（1925）8月に、それまでの茅葺（かやぶき）屋根をそれぞれ銅板葺に葺き替えて、大規模な模様替えをしている。しかし、板葺屋根から銅板葺屋根に改造を加えても、社殿の文化財としての価値は失われていない。

この神社は正面の鳥居から参拝するのが正しく、大工棟梁もそこにデザインの工夫をしている。正面の鳥居をくぐると、参道はいったん低くなり、谷を横断して進むように造られている。そして石段をのぼり終わる頃に拝殿の向拝（こうはい）の唐破風（からはふ）が見えてくる。石段の途中でしばしたたずんで、向拝の屋根から鑑賞を始める。屋根の正面の鬼瓦、大きく雄大な唐破風の曲線、そして雄渾な彫刻…と。少しずつ目を下に向けていきながら石段をのぼりきると、拝殿の全景が見えてくる。だから、拝殿の大きさからして向拝が大きく、唐破風も当然大きいのである。

拝殿の周囲は背面を除き回縁（まわりえん）となっており、建具は横桟（よこざん）の多い舞良戸（まいらど）である。拝殿および幣殿の天井は格天井（ごうてんじょう）である。社殿の側面に回り全景を鑑賞すれば、本殿は反りのある切妻造りで前方に屋根をのばして庇を出す流造（ながれつくり）である。本殿の胴羽目板（どうはめ）や脇障子（わきしょうじ）は中国の故事をモチーフとした見事な彫刻が施されており、江戸時代後期の彫工の優れた技術を垣間見ることができます。また、軒の組物（くみもの）および腰組も当時の正規の宮大工の手によって意匠と造作がなされている。

（案内）

JR津田沼駅北口から二宮神社行きバスで終点下車。

難陀龍王堂

所在地　船橋市本町３丁目24番６号
所有者　覚王寺

正　面

彫　刻

覚王寺は真言宗豊山派に属する寺院で、開創は室町時代後期といわれる。江戸時代の寛文（1661～1673）、元禄（1688～1704）の頃から興隆したといわれ、10ヶ寺の末寺を有していた。

龍王堂の本尊である難陀龍王は海上守護の神で、経典に「善く人心に応じ風雨を調え人をして歓喜せしむ」と説かれており、昔から竜神様として船橋の漁師町の人々の信仰を集めてきた。覚王寺年中行事記によれば、毎年４月３日には海上保全・豊漁祈願のための難陀龍王護摩供が修され護符が配られたという。

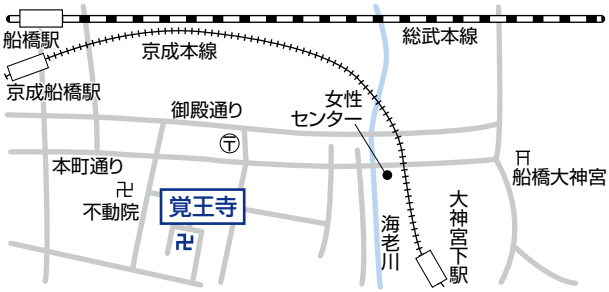
この龍王堂の当初の様子については不詳であるが、現在の堂は嘉永３年（1850）に再建されたもので、棟札が残されている。大工棟梁は芝谷兼吉平政保で、船橋九日市の住人である。寺伝によれば、江戸時代末期には数度の津波の被害で伽藍は荒廃していたが、当時の住職が本堂再建を企て、難陀龍王堂も再建したという。

龍王堂は総欅造、形式は一間社流造である。この堂を特徴づけているのが堂を覆っている彫刻である。棟札によれば、彫刻師は江戸長谷川町の住人松田乙次郎藤原一元で、この人物についてはよくわかっていないが、この堂に残る彫刻からは、卓抜した技量のほどがうかがえる。正面（南面）は龍、北・東・西面の彫刻の題材は中国の故事にちなんだ仙人や仙女であるが、彫りが深く立体感のある表現で、それぞれの画面が躍動感にあふれており見事である。

（案内）

ＪＲ船橋駅から徒歩12分または京成電鉄京成船橋駅から徒歩約10分。

通常公開は行っておりません。



清川コレクション（特選）

所有者　船橋市

『冬瓜桃葡萄図』　椿　貞雄

清川家は、相馬中村藩（現、福島県）の藩医であった初代清川務氏から美術品に対する造詣が深く、二代弘道氏は当時船橋に在住していた椿貞雄と親交があり、三代尚道氏は学生時代に椿に師事し、実作に励んだ体験を持っている。

清川コレクションは代々医業を営んできた清川家が収集・保存してきたもので、平成11年（1999）および平成12年（2000）、船橋ゆかりの画家の椿貞雄をはじめ著名な作者の作品184点が市に寄贈された。これらの作品の中から特に秀逸な作品8点が船橋市文化財に指定されている。

【椿　貞雄】〔明治29年（1896）～昭和32年（1957）〕

山形県米沢市に生まれる。船橋尋常高等小学校（現：船橋小学校）の図画教師となり、昭和2年（1927）から船橋市に移り住む。岸田劉生に師事し、画架を並べ、作品を制作。油彩による「写実」を追求した。昭和7年（1932）の渡仏以後、劉生風を離れた艶消しの写実に向かう。と同時に東洋風洋画を目指し、独自の境地に到った。椿の画業を支援した清川家とのかかわりのなかで、船橋の美術活動の中心的存在となった。西福寺（船橋市宮本）に墓がある。碑銘は武者小路実篤筆。

【岸田　劉生】〔明治24年（1891）～昭和4年（1929）〕

東京市に生まれる。印象派に影響を受けた絵を描いていたが、西洋の古典技法に興味を移し、写実に転じた。娘麗子をモデルに描いたシリーズが有名。

【岸　連山】〔文化元年（1804）～安政6年（1859）〕

江戸後期の画家。円山応挙門下の岸駒を祖とし、独自の写生画風を形成した岸派の中心画家。

【石井　林響】〔明治17年（1884）～昭和5年（1930）〕

千葉県山武郡土気町（現：千葉市）生まれ。晩年大網白里町に移り住む。田園風景を自由闊達に描いた。

（案内）

企画展示等で公開。通常の公開は行っていません。

（問い合わせ先）船橋市教育委員会文化課　TEL ０４７－４３６－２８９８

	洋画	①伊豆風景 ②椿　貞雄 ③54×76cm ④昭和3年（1928）	椿は昭和3年（1928）、静岡県田方郡上多賀（現、熱海市）を写生旅行し、制作した作品。ウルトラマリンの海が、むしろ藁屋根のある素朴な風景に厚みのある静けさを漂わせている。清川弘道氏が初めて収蔵した椿の作品である。
	洋画	①娘（パリに於て） ②椿　貞雄 ③27.7×22.5cm ④昭和7年（1932）	椿は昭和7年（1932）渡仏、パリに滞在。貞雄の描く人物といえば劉生風の堅い写実と決まっていたが、そこから抜け出そうとする意欲が見える。奔放なヘア･スタイルの扱い、横顔の切りとったような造形は、小気味よくエキゾチックな娘を描き出している。
	洋画	①諸果図 ②椿　貞雄 ③41×53cm ④昭和5年（1930）	椿は東洋的洋画をめざし、油絵具のテカテカした光を嫌った。ここでも､染付角皿に盛った果物たちは､しっとりと落ちついて見え、ものがそこに在るという実在感やその神秘性を表現しようと工夫して描いたものであることがわかる。
	洋画	①冬瓜桃葡萄図 ②椿　貞雄 ③33.2×53cm ④昭和21年（1946）作 昭和22年（1947）加筆	椿は劉生の冬瓜図から学び、戦前戦後を通していくつもの作品を描いた。冬瓜の粉を吹いた表面の質感や塊としての存在感を細密描写で丁寧に描き出している。
	洋画	①雪の桜島 ②椿貞雄 ③45.8×53 ④昭和31年（1956）～昭和32年（1957）	椿は晩年、長崎の画友小林敏夫に招ばれて滞在。鹿児島にも旅行し、桜島の壮容に接する。本作は大雪に包まれた桜島の意外な景観に感動し、描いた一連の雪の桜島のひとつである。山皴(さんしゅん)のリアリティーは椿の山岳画の独自な特長といえる。（山皴＝山のひだ）
	日本画	①菜根図 ②岸田劉生 ③129.1×33.8 ④不詳	劉生は関東大震災を契機に京都に移住した後、宋元画を中心に中国画に魅かれ、大いに蔬果図(そかず)を描くようになる。これは蕪だがいっぱいに葉を広げて新鮮さを強調している。（蔬果＝野菜と果物）
	日本画	①（六曲一双）松の図 ②岸　連山 ③160.8×53（2枚） ×59.8（4枚） ④弘化3年（1846）	連山は幕末の岸派画家。岸派は円山応挙門下の岸駒の末裔。江戸の写生派といえよう。修理もすんで見事な松のたたずまいを見せている。代表作にふさわしい。
	日本画	①閑郷柳塘之図 ②石井林響 ③154.3×34.7 ④昭和3年（1928）	この作品は、昭和2年作「野趣二題」の右幅「枝間の歌」に近く、細かい点描を散らした柳並木の間に散在する草屋が、のんびりと初夏を告げている。

①作品名　②作者　③サイズ（縦×横）　④製作年

石造自休大徳坐像

所在地　船橋市古和釜町365　東光寺

管理者　古和釜町石仏保存会

この石仏は東光寺の厨子に納められていたもので、高さ27cm、袈裟をかけた僧形の坐像で、蓮華座の上に載せられている。

像の背面に「自休大徳」という文字が刻まれている。自休とは江戸時代前期の侠客、深見十左衛門の号である。古伝によれば、十左衛門の父は福島正則の武将で、十左衛門自身も藤堂家に仕え高禄の士であったが、自ら浪人し、侠客の頭となった。しかしその後、幕府に捕えられ、隠岐に島流しとなった。約30年後、赦されて江戸に戻り、剃髪して自休と号し、江戸駒込片町（現在の東京都文京区本駒込）龍光寺内に庵を結んだ。剃髪後、石工に刻ませたのがこの石仏であるといわれ、十左衛門に長い間仕えていた者が、その没後この像を持って全国を行脚し、最後にこの地にたどりつき、像を東光寺に安置したとも伝えられている。十左衛門は、歌舞伎「助六所縁江戸桜」に登場する『髭の意休』のモデルといわれ、墓所は本駒込龍光寺内にある。

古和釜の東光寺は天台宗の寺院で瑠璃光山青蓮院といい、もとは印旛郡永治村小倉泉倉寺（現在の印西市）の末寺であった。起源は不明であるが、境内東北の墓地から室町時代の板碑や銘文がある宝篋印塔の基礎部が出土していることから、かなり古い起源を持つ寺であると考えられる。

（案内）

JR船橋駅または新京成電鉄北習志野駅からバスで

「古和釜十字路」下車徒歩約４分。

木造地蔵菩薩坐像

所在地　船橋市飯山満町２丁目744番１

所有者　ゆるぎ地蔵保存会

飯山満町２丁目の堂に安置されている地蔵菩薩は「ゆるぎ地蔵」と呼ばれている。江戸時代、この地には「揺ぎの松」と呼ばれる古松があった。この松は有名な巨木で、根が地上から立ち上がり、根方をくぐると梢まで揺らいだのでこの名がついたといわれる。その松が枯死したとき、それを惜しんだ里人が、木食僧に２体の地蔵菩薩を彫ってもらい、小さい方を薬円台の高幢庵に移し、大きい方を松のあったこの場所に残したという。（現在、ゆるぎ地蔵の前に残る水向石に刻まれた年号から、享保８年（1723）頃に造られたと推定される。）寛延２年（1749）の『葛飾記』に「揺ぎの松」が紹介されているが、同書では、揺ぎ松の位置を誤って記述しており、高幢庵の木っぱ地蔵が揺ぎの松で作られたとしている。ことの真偽は確かではないが、ほぼ同時期に作られた２体の地蔵と、揺ぎの松、木食僧観信が結び合わされて考えられた可能性もある。

ゆるぎ地蔵の像高は172cm、頭頂から顎の長さ50cm、蓮台の高さ29cmで、一木で彫られた像で、容貌は温和で慈悲に満ちている。作者については木食僧観信と伝えられているが、観信作と伝えられる木っぱ地蔵と比べて彫技が洗練されており、専門仏師作の可能性もある。なお、かつては頭光を有していたらしく、像背面の下に支柱を差し入れたほぞ穴がみられる。

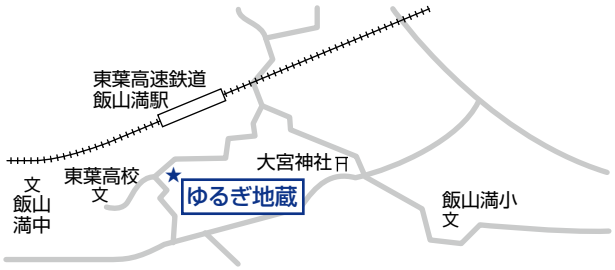
（観信、木っぱ地蔵については、52ページ参照）

地蔵菩薩　ミニ知識

釈迦入滅の後、56億７千万年後に弥勒仏が出現するまでの仏のいない間に現れて、六道（地獄・餓鬼・畜生・阿修羅・人・天）の衆生を救っているという菩薩。そのために、親しみやすい比丘（僧侶）の姿で表されている。六道の救済のために六つの分身（六地蔵）を持つとされる。日本では平安時代末から信仰され、現在に至っている。

（案内）

東葉高速鉄道飯山満駅から徒歩約10分。



木造毘沙門天立像

所在地　船橋市大神保町282
所有者　西福寺

この毘沙門天の像高は60cm、寄木造・彩色仕上げで、玉眼を入れている。台座の高さは23cmで、二邪鬼まで一材で作られている。

江戸時代初期の作と推定され、鎌倉時代のものに比べるとやや力感に乏しい面はあるが、端正な彫りの像である。二邪鬼を踏まえて立ち、光背は輪宝光である。左手と宝塔、光背は後補のものと思われるが、右手に持つ三叉戟は製作当初のものとみられる。胡粉地に施した彩色はほぼそのまま残っているが、台座のみは胡粉まで剥落している。

この像は、現在、本堂内に安置されているが、もとは境内の毘沙門堂にあった。西福寺は一向宗の寺であったが、戦国時代に日国によって日蓮宗の寺として再興された。寺はその後、日国の子の日用が継ぎ、慶長17年（1612）に没していることから、この毘沙門天像は日用か、その子の日玉が残したものとみられる。なお、胎内に明暦２年（1656）板行の法華経が納められている。

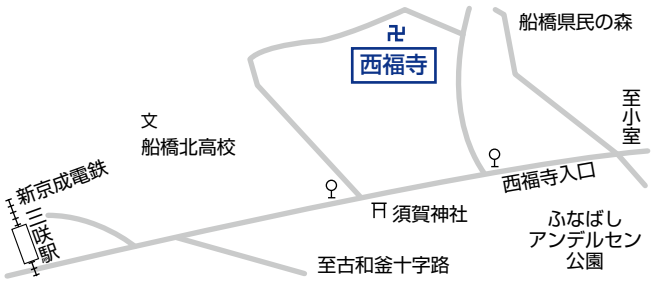
毘沙門天　ミニ知識

もとは古代インドのkuveraという神であるが、仏教では、天界に住み北方を守護する護法神の一つと考えられている。須弥山の四方を守る持国天、増長天、広目天、多聞天の四神（四天王）のうちの多聞天と同一の神とされる。日本では福徳富貴を招く神として単独でも信仰され、七福神にも入れられている。仏法守護の役割を表すために、甲冑をつけて武装し、忿怒の表情をした像が多い。右手に宝棒や三叉戟、左手に宝塔を捧げ持ち、二邪鬼の上に立つ。変わった形として、二尊が背中合せの「双身毘沙門天」や鞍馬寺の「王城鎮護像（額に手をかざして遠くを眺める姿）」、教王護国寺（東寺）などに残る「兜跋毘沙門天」などがある。

（案内）

ＪＲ船橋駅北口または新京成電鉄三咲駅から
バスで「西福寺入口」下車徒歩約13分。

※「板碑（弘安九年七月十五日在銘）」（35ページ）
も同じ場所にあります。



木造観世音菩薩立像

所在地　船橋市藤原3丁目2番18号　藤原堂

管理者　藤　原　堂

この像は、旧藤原新田の観音堂（藤原堂）の本尊で、像高は83cm、一木造で彫眼である。頭部と体幹部を一木で造り、両肩より先の部分と両足、天衣は別材である。

衣文部は金箔に漆で文様を描いているが、記録によれば、これらの彩色は文政11年（1828）になされたものである。製作年代は詳しい調査の結果、江戸時代前期とする見方が有力である。平成5年（1993）に古態保存のための解体修理が行われた。なお、この像は躰幹の曲がりからみて、元々は阿弥陀三尊の脇侍であった可能性が高い。

藤原新田は、江戸時代前期に幕府の牧と原野が開墾されて成立した新田村落で、延宝3年（1675）に検地が行われ、正式な村として認められた。その後、この地に田中三左衛門が中心となって堂を建立し、元禄3年（1690）に、藤原とゆかりの深い行徳の徳願寺から観音像を請い受けて安置したのが起源といわれている。当初から秘仏とされ、観音菩薩は33通りに姿を変えて衆生を救うということに由来して、33年に一度、開帳されてきた。

この像は古来『身代観世音』と呼ばれ、丹波国穴太寺（京都府亀岡市）の身代観世音と同木同作で、丹波国見樹寺にあったものを招来したという縁起が伝承されており、次のような諸説がある。①万治2年（1659）に、行徳の田中三左衛門が御普請奉行となって丹波桂川の普請を行ったとき、見樹寺から請い受けて、行徳の徳願寺に納めた。②徳願寺の貞牛上人が諸国行脚の折り、見樹寺でこの観音像に魅せられ、譲渡を願ったが最初断られた。そこで、断食行をしたところ、満願の夜に見樹寺住職の夢の中に観音があらわれ、お告げをしたため徳願寺に贈られた。③延宝2年（1674）の頃、見樹寺の潮韵和尚が、恩師である徳願寺の貞牛上人の菩提を供養するためにはるばる贈り遣わした。

なお、縁起にある穴太寺の重要文化財・十一面観音立像（盗難にあい現在行方不明）は、平安時代の作で像高110cm、直立した独尊形式の像である。同木同作というのはあくまで縁起の中のことである。

藤原堂　身代観世音の縁起

縁起は数種類あるが、ここに掲載したのは宝暦十二年のものである。漢字を常用漢字に直し、句読点を補った。

略　縁　起

試身代正観世音菩薩者、西国廿壱番丹波国穴穂寺正観世音菩薩ト同木同作。御長ハ三尺ニ而、仏工感世之御作。誠ニ日本二躰之霊像也。凡年代ヲ尋ルニ八百余年。

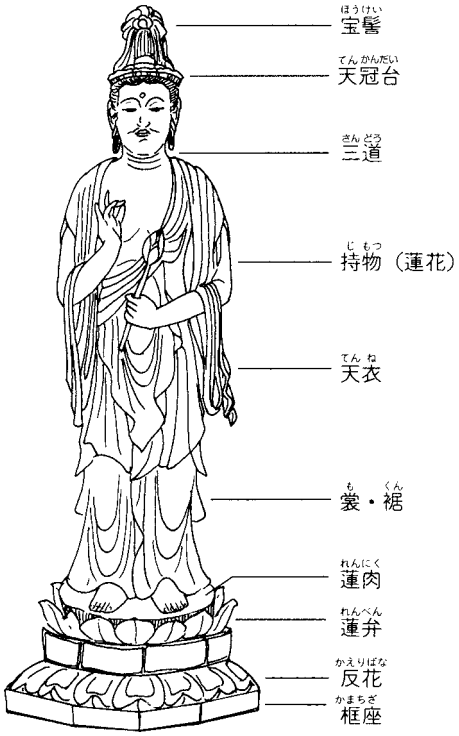
往昔人王六十二代村上帝之御宇、応和弐年、丹波国宇治宮成ト云ル長者、観世音信仰ニより、安阿弥ノ弟子仏工感世ヲ頼デ、先為レ試毎日普門品三十三巻ヲ読誦シ、一刀三礼ニ而奉彫刻也。所謂身代観世音ト奉称、尋二レ霊験ヲ一、往昔丹波国大江山之後ニおゐて仏工感世盗賊之逢二ヒ剱難ニ一、其時此尊像即身代ニ立至リ、故ニ号シテ身代観世音と奉称也。誠ニ御胸御疵ヲ給リ、即其御疵より血流、宝冠御腰ヲ傾ケ御座ス。

蓋徳願寺江奉納濫觴ヲ尋ルニ、往昔延宝二年之頃、当寺十三代已前空誉貞牛上人ノ御直弟、丹波国見樹寺之現住潮韻和尚、誠ニ師之忘恩ヲ為レ報、当寺江奉遥ニ送也。従夫於当所ニ観世音之霊地ヲ改一宇ヲ建立シ、奉安置也。

右、縁起広多ナル故略シテ如斯誌而已

宝暦十二年午四月朔日午刻開帳

聖観世音菩薩立像



◇観世音菩薩については30ページの〈観世音菩薩ミニ知識〉を参照。

身代観世音の伝説　ミニ知識

むかし、丹波国の長者であった宇治宮成という人は、観世音菩薩の像を造ろうと思い、当時、京の都で有名であった感世という仏師に頼んだ。感世は観音を熱心に信仰していたので、毎日、観音経を唱えていた。宮成から頼まれた観音像が見事に出来上がったので、感世はそれを宮成の家に運び、謝礼をもらって京に戻ろうとしたのだが…。丹波国大江山の辺りで、感世に盗賊が襲いかかった。感世が一心に観世音菩薩に祈っていると、刀で切られたはずなのに無事であった。不思議に思った感世が宮成の家に戻って観音像をみると、なんと、像の宝冠（ほうかん）は傾き、左の腰から血が流れているではないか。さては、観音様が身代りになってくださったかと、感世、宮成ともどもに驚き、感涙を流した。この霊験は国中に鳴り響き、以後「身代観世音」と呼ばれるようになったそうな。（ここでは刀で斬られる話だが、感世が弓で射られ、矢が観音像に刺さっていたという話もある。）

（案内）

ＪＲ武蔵野線船橋法典駅から徒歩約15分。

ＪＲ西船橋駅から白井方面行きのバスで「上山町二丁目」下車。

非公開（33年ごとに御開帳）

最近では、平成6年11月に開帳された。

木造阿弥陀如来立像

所在地　船橋市海神1丁目17番16号　念仏堂

管理者　念仏堂世話人

この阿弥陀如来立像は海神の念仏堂内に安置されている。像は寄木造で像高70cm、台座の高さ55cm、光背は舟形で高さは110cmである。

作風は端麗優美な定朝様で、平安時代末期前後の作とみられており、美術的にも優れた仏像である。なお、光背と蓮華座は江戸時代のものに変えられている。

念仏堂の縁起によると、この仏像はもともと当地の天摩山善光寺にあったが、寺が火災にあい、一時、小金（現在の松戸市）の東漸寺に預けていたものを江戸神田の高麗屋佐次右衛門が請い受けて、念仏堂に納めたといわれる。（善光寺は海神にあったといわれる古寺。俵藤太藤原秀郷の創建という伝説があった。）

念仏堂の創建時期は不明であるが、敷地内の墓地には慶安4年（1651）の墓碑をはじめ古い墓碑があるので、かなり古くからあった庵であろう。元禄年間（1690頃）に芝増上寺36代住持となった祐天上人の教化により、寺の形を整えたといわれる。念仏堂の名のとおり、常念仏の修行が行われ、信者が集まって念仏を唱えていたという。百万遍念仏の大数珠が残されている。なお、境内には観音堂があり、33体の観世音菩薩像が安置されている。これは、前述の高麗屋佐次右衛門が元禄14年（1701）に寄進したものである。

墓地には、慶応4年（1868）の戊辰戦争時に戦死した官軍の福岡藩士小室彌四郎と従卒3名の墓がある。慶応4年閏4月3日に、この近くの海神辻で旧幕軍と官軍の戦いがあり、小室らはその時に戦死したもので、現在の墓碑は明治19年（1886）に千葉県によって建てられたものである。

定朝様の仏像　ミニ知識

定朝は平安時代中期の仏師。平明で円満な日本化された仏像を完成させ、その作風は定朝様として後世の造仏の規範となった。現存する確実な遺作は、京都宇治平等院鳳凰堂の阿弥陀如来像のみである。

常念仏堂縁起

善光寺八幡山旧記

北総東葛飾郡船橋駅海神邨無縁庵室常念仏堂本尊無量寿仏の由来ハ昔時武州弥陀ヶ嶽に夜ナ夜ナ光明を放つ霊木あり近里の農民是を怪しミ年月を送リける或時恵心僧都此の辺りを通らせ給ふに専ラ此風説あれり、依之彼の山中を尋ね玉へハ究メて弥陀か嶽に光明を放つ古木あり僧都驚き謹て一七昼夜間唱名ありけれハ満ル夜夢想ありて安養浄土より阿弥陀仏来迎ス僧都一心に観念し閉目開目し玉ヒて彼の観想を拝しけるに物の音に驚き覚め玉へ弥々信心肝に命し玉ひ天に仰き地に伏し玉ヒて無量寿仏の霊相を観念し奉リし不思議さや来迎疑ヒなしと既に此の霊木を以て彫刻し奉ル処の弥陀仏来迎の尊像なり此の尊像を一刀三礼なし玉へて造立成就なりしか其後故あつて当所善光寺と申寺に彼の像を安置し奉ルこと爰に年久しといへり（後略）

常念仏堂

（前略）此尊像ハ其むかし当邨八幡山善光寺の本尊なりしを鴻の台落城に及ひしより北条氏の軍勢此の地に押来り里見氏との戦乱甚しきに付其砌リ此の寺亡滅しけるより暫ク小金の東漸寺に在マせしを当邨に堂宇建立ありしかハ直チに故郷に帰ラせ玉フとハいと不思議なる奇瑞にこそ侍るなれ（後略）

阿弥陀如来立像

阿弥陀如来　ミニ知識

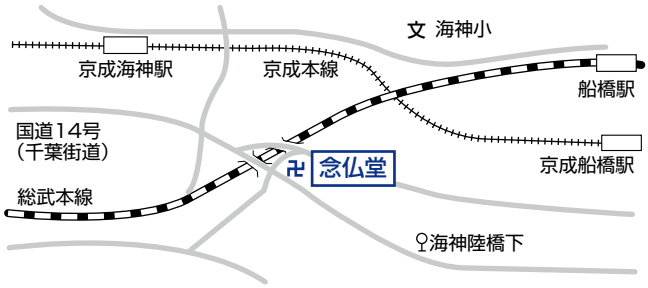
念仏で唱える「なむあみだぶつ」は“阿弥陀如来に帰依する”という意味。

梵語のAmitayus、Amitabhaの音から“阿弥陀如来”と呼ばれ、無量の徳、無限の慈悲を持つといわれる仏。経典によれば、釈迦と同じように元はインドの王族の王子であったが出家し、48の大願を成就して仏になり、西方の極楽浄土の教主となったという。48の本願のうち、特に「往生願」は、念仏を行う者は必ず極楽浄土に往生させるというもので、日本でも浄土思想の広がった平安時代末期から盛んに信仰され、各地に阿弥陀堂が建てられた。尊像が数多く作られ、阿弥陀来迎図などの絵画として優れた遺品が多い。阿弥陀三尊という形式は中尊が阿弥陀如来で、観世音菩薩と勢至菩薩を脇侍とする。また、９体の阿弥陀如来の並ぶ九体阿弥陀も現存している。阿弥陀如来の姿は、通常、寒暑をしのぐだけの衣をまとい、全く装飾をつけていない。釈迦如来、薬師如来と共通する姿に造られている。

（案内）

京成電鉄海神駅から徒歩約９分。
ＪＲ船橋駅から徒歩約16分。

見学する際は事前の連絡が必要です。
（連絡先）船橋市教育委員会文化課
TEL ０４７－４３６－２８８７



木造聖観世音菩薩立像

所在地　船橋市夏見6丁目23番3号
所有者　長福寺

夏見の長福寺は、縁起によれば、平安時代中期に定朝作の観音像を祀った堂が営まれたことに始まるという。

しかし、現時点で知られる資料からは、室町時代後期以前の事歴はまったく不詳である。室町後期の天文5年（1536）に本像が造立されたが、その本願主は「当寺前住明林旭公首座」であった。この僧名からすると、本像造立の時点では既に禅宗（曹洞宗）であったと想定される。

過去帳によれば、永禄7年（1564）に戦死した夏見加賀守政芳という人物が「当山往古開基」と記されているが、その間の経緯は不明である。江戸時代に入ると、三代将軍家光の慶安2年（1649）に、観音堂領として5石の朱印地を与えられ、明治まで継続した。

本像は像高56.8cm、蓮台に立ち、厨子に納められている。渦巻紋の光背を有し、頭には宝冠を戴き、胸には瓔珞を垂らす。現状は古色一色であるが、これは元禄期の修補の際のものとみられ、かつては漆箔が施されていたものであろう。玉眼・白毫には水晶を入れている。

藤原様式を模した像で、一部に宋朝風の影響もうかがえる。定朝作とされてきたが、平成2年（1990）に解体修理が行われた際に胎内墨書銘が発見され、天文年間の作であることが判明した。銘文によれば、作者は仏師成就坊秀印、「旦那」（寄進者）は「夏見豊嶋勘解由左衛門尉平朝臣胤定」であった。なお、蓮台・光背・厨子は元禄11年（1698）の後補である。

本像は地方の作としては優れており、また胎内銘は当地方の戦国中期の状況を解明する貴重な資料である。

胎内墨書銘

胎内墨書銘

（腹部）
夏見
旦那　勘解由左衛門尉平朝臣胤定
豊嶋
彦三郎弟源五郎戒名道頓子息彦三郎胤重　丙申
（年）
天文五季
十二月廿四日
筆者慶仲正善□
佛師成就坊秀印　正順　主
夏見山長福寺本尊　聖行海小聖知順
（背部）
奉再興本願當寺前住明林旭公首座
為琇光禅尼　逆修也
（首部）
其内
（カ）
走回妙春

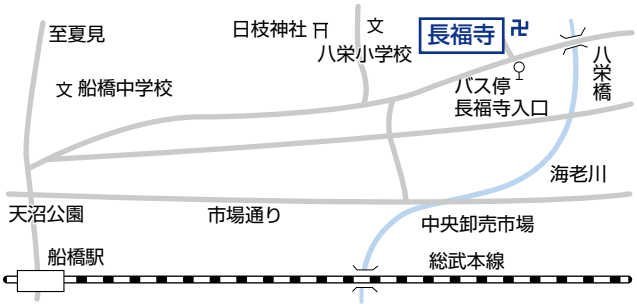
観世音菩薩　ミニ知識

観世音菩薩（観音）は一切の衆生を観察し自在に救済するという菩薩で、南海の補陀落山に住むとされている。日本では仏教伝来の直後から観音信仰が始まり、法華経の普及に伴ってますます盛んになった。衆生を救うために僧や童子など33の姿に化身するということから三十三観音の信仰や、三十三霊場が設けられて、現在でも巡礼が行われている。観音像は飛鳥時代からたくさん造られ、時代が下るにつれて十一面観音、千手観音、如意輪観音などの多面多臂の変化身の観音も造られるようになった。変化身の観音と区別するために、変化していない一面二臂の観音を聖観音と呼んでいる。菩薩（菩提薩埵の略）は精進する修行者という意味。菩薩の基本的な姿は、出家前の王子だった頃の釈迦の姿を表したものといわれ、頭髪は美しく結い上げ、宝石をちりばめた宝冠を戴き、胸には瓔珞を垂らし、腕や脚にも飾りをつけたりする。

（案内）

ＪＲ船橋駅北口からバスで「長福寺入口」下車
徒歩約１分。

非公開（50年ごとに御開帳）
最近では平成元年（1989）に開帳された。



木造稲荷神立像

所在地　　船橋市内

所有者　　個　人

この稲荷神立像は、台を除いた高さが約16㎝、岩座の掘りこみ部分や狐の口など、一部に彩色を残す部分もあるが、一木造の素地像である。背面に「佛師松本良山作」の墨書銘があり、江戸時代末期の作と思われる。狐は躍動的で、全身はわずかに鑿跡を残して「毛」の柔らかさを表現している。その上に立つ稲荷神は写実的な表現であるが、両袖は風にたなびくように浮遊し、像に動きを与えている。手足の造形は極めて細かい刀で彫りこんで指・爪まで表現され、像全体の表面はこのような刀で磨くように、美しく仕上げがなされている。頭部も克明な描写で顎鬚は繊細な表現がなされている、小品ながら優れた作品である。

作者である仏師松本良山は、享和元年（1801）に漁師町の一角、九日市村舟丁（現在の本町３丁目）に生まれたという。その頃、漁師町出身で江戸神田弁慶橋で仏具商を営み成功した松本三五郎は、子がいないため、乳飲み子の金兵衛（一説では松吉）を養子とした。しかし、金兵衛が13歳のとき、三五郎夫婦に子が生まれたため、家出をして京都で仏師となる修行をした。師匠は大仏師山本茂祐で、19歳で良山の号を与えられて江戸に帰り、さらに板彫りの名人後藤弥太郎について技を磨いた。特に不動明王の彫刻に優れていたので「不動金兵衛」と称されたという。

現在の代表作は成田山新勝寺旧本堂（現：釈迦堂）堂羽目の五百羅漢彫刻で、狩野一信の下絵をもとに、10年の歳月をかけて制作したという。安政４年（1857）、法橋の位を賜り、明治５年（1872）に死去し、東京谷中の観智院に葬られた。本町３丁目の不動院にも墓碑がある。

（案内）

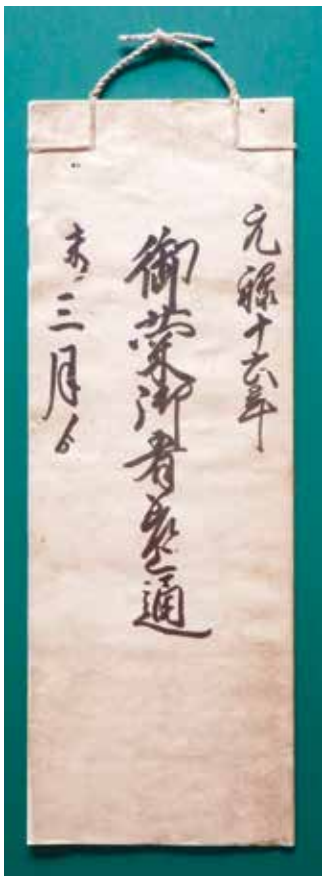
個人所有のため、見学する際は事前の連絡が必要です。

（連絡先）船橋市教育委員会文化課　TEL ０４７－４３６－２８８７

船橋浦漁業関係古文書類

所在地　船橋市西船1丁目20番50号（船橋市西図書館）

所有者　船　橋　市



御菜御肴差上通

船橋浦は近世以後、内湾の代表的漁業地帯であった。一般に江戸時代前期から漁業中心の生活をしていたところを本浦（立浦）と呼ぶが、船橋は本浦であり、さらに御菜浦であった。御采浦というのは、将軍家の台所に魚介類を納める浦のことで、芝浦や品川浦などの御菜八ヶ浦が有名であったが、船橋浦も江戸時代前期には月に６度ずつ魚類を献上した御菜浦でもあった。船橋浦が御菜浦になった経緯については、享保15年（1730）の訴状には「権現様　御入国以来　御台所の御菜肴一ヶ月ニ六度宛（中略）持参仕」とあり、天明元年（1781）の訴状では「乍恐　権現公様上総国東金村へ就　御成ニ、当村内に新御殿造立之有、右御成還御共右御殿へ入御被為　成候節、御菜御肴献上被仰付」としている。いずれにしても、魚介献上は家康から仰せ付けられたと主張しているのである。

そのため、船橋漁師は魚介献上の御用をつとめるかわりに、広大な漁場を占有することを許されていた。東は鷺沼（習志野市）前面の落の澪、西は湊（市川）前面の貝ヶ澪までで、沖は櫂の立つところまでとされていたのである。

その後、江戸での需要が増え、後発の半農漁村が活発に漁をし出す江戸中期になると、境界近くでは頻繁に漁場争いが生じた。その裁決は代官所や評定所で行われたため、多くの訴状や協定書が作成された。それらの書類は最も重要なものであったから、漁師代表や会所で大切に保管されて後世に伝えられた。その内の江戸時代から明治時代前期の古文書は、船橋浦のみならず、内湾漁業史に関する貴重な史料であり、一括して文化財に指定された。内訳は、巻物にまとめられた万治２年（1659）～安政３年（1856）の古文書33通、元禄16年（1703）の『御菜御肴差上通』１冊、江戸時代後期の「浦絵図面」１枚、明治21年（1888）に前出の古文書などを書き写して冊子とした『船橋漁浦記事』１冊である。また、「船橋・羽田間彩色浦絵図」１枚が平成16年（2004）３月22日付けで追加指定された。

船橋漁浦記事

「船橋・羽田間彩色浦絵図」

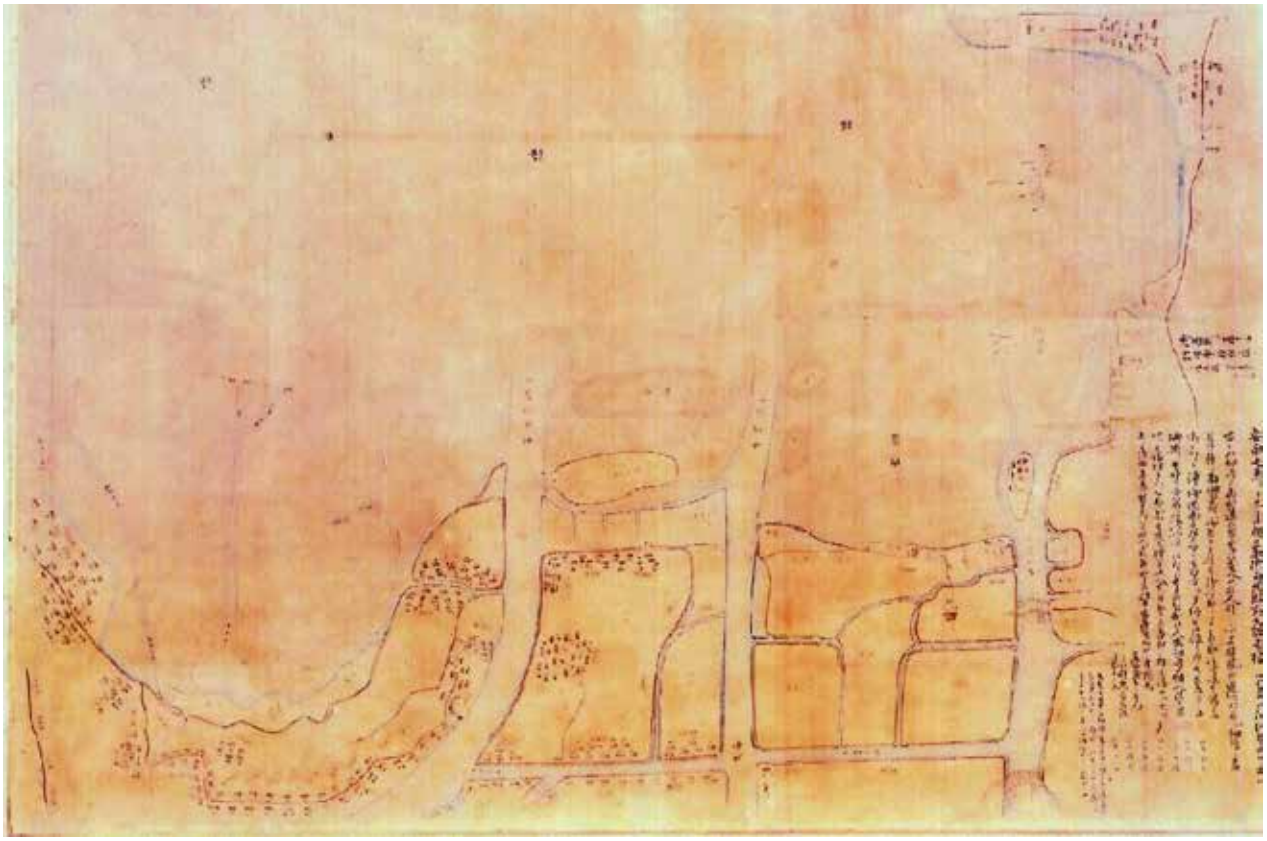
船橋市から羽田（大田区）までの東京湾と、その周辺地域が描かれた縦65cm、横95.5cmの絵図である。田畑や海川などが彩色され、海神や中山など市内の地名の他に行徳（市川市）・築地（中央区）・品川（品川区）など現在も使われている地名を見ることができる。

絵図の右下に書かれている文言によると、これは安永（あんえい）７年（1778年）に羽田沖で猫実漁師と佃島漁師の間で漁場と漁法に関する争いが起き、訴訟沙汰になった際に南御番所牧野大隅守（南町奉行牧野成賢）へ提出したものの控えである。

この訴訟の詳しい経緯は未詳であるが、天明（てんめい）２年（1782）正月の「三番瀬漁場争論裁許に付請書」（『船橋市史史料編十』）によると、佃島漁師の、沖合入会の六人網は佃島だけができる漁法、という主張は認められなかったようである。

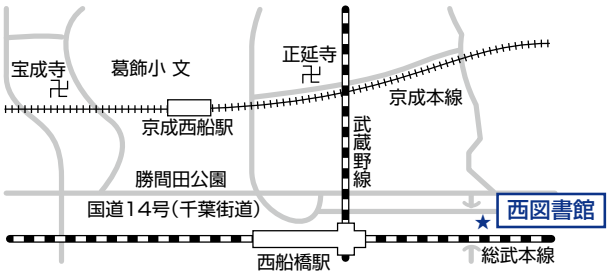
さらに、これに関連する記事が『江戸川区史　全』にあり、六人引網使用に関し、佃島が東宇喜田村・堀江村および猫実村等合計９ヶ村を相手取り訴訟を起こした旨の記述がある（どの史料によったかは不明）。

安永７年の争論は、いくつもの浦を巻き込んだ漁場と漁法をめぐる大きな争論だったのである。この浦絵図はその争論に関する数少ない資料である。



（案内）

ＪＲ西船橋駅から徒歩約５分。
京成電鉄京成西船駅から徒歩約３分。
船橋市西図書館のパソコンで閲覧ができます。
（連絡先）船橋市西図書館
TEL　０４７－４３１－４３８５



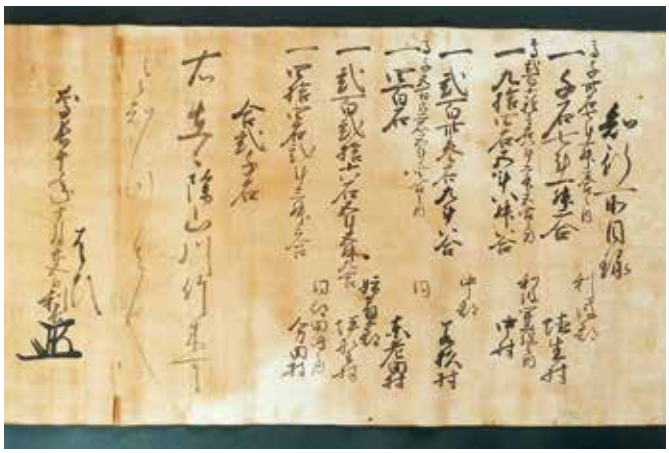
（備考）

平成16年3月22日
「船橋・羽田間彩色浦絵図」追加指定

成瀬家文書（なるせけもんじょ）

所在地　　船橋市内

所有者　　個　人



知行所目録

成瀬系図　全

成瀬家は、江戸時代初頭より明治維新まで加賀藩（石川県）前田家につかえた重臣であった。現在では通称、加賀成瀬家と呼び、かつて船橋西部一帯を領有した成瀬家（栗原藩主・兄は犬山城主）とは別家である。本市ではその他にも両成瀬家に関する文化財を指定している。加賀成瀬家の所蔵物では「南蛮胴具足（9ページ）」、犬山城主の成瀬氏に関しては菩提寺（ぼだいじ）の宝成寺（ほうじょうじ）にある「成瀬氏の墓　附　墓誌（55ページ）」がそれである。

成瀬家文書は219点に及び、主な内容は系図･由緒書51点、武芸などの免許･伝書43点、領地･知行39点、書状･判物39点である。特に系図･由緒書が多いが、「成瀬系図　全」には“南蛮鎧”の由緒が記述されている。さらに、系図によれば加賀成瀬家と犬山城主成瀬氏とは共通の祖先を持ち、戦国時代の成瀬正一（まさかず）（号は一齊（いっさい））にさかのぼることができる。正一の長男正成（まさなり）は後に尾張藩家老・犬山城主となって３万４千石を領有するが、当初４千石が船橋西部一帯にあった。正一の次男吉正（よしまさ）は最初浜松城の徳川家康に仕えたが、故あって、慶長（けいちょう）10年（1605）父正一が掌握していた根来衆（ねごろしゅう）40騎、足軽40人を率いて加賀前田利常（まえだとしつね）の家臣となった。このように、両成瀬氏の記述があり、市史研究上の史料となっている。この他、領地・知行、書状・判物など、領主前田家の発行したものが多くあり、免許・伝書も数が多い。文書の保存状態は良好で虫喰い破損などはほとんどみられない。

（案内）

個人所有のため、見学する際は事前の連絡が必要です。

（連絡先）船橋市教育委員会文化課　TEL ０４７－４３６－２８８７

船橋市西図書館のパソコンで閲覧ができます。

（連絡先）船橋市西図書館　TEL ０４７－４３１－４３８５

板碑（弘安九年七月十五日在銘）

所在地　船橋市大神保町282
所有者　西福寺

この板碑は武蔵型板碑で、縦57cm、幅27.5cmで、石質は粘板岩である。山形の頂部で二条線の切り込みがあり、身部の上部は天蓋で飾り、蓮座上に阿弥陀如来の種子であるキリークを大きく彫っている。下には左右に花瓶があって花を挿してある。花瓶の間に弘安9年（1286）7月15日の紀年銘が刻まれている。

鎌倉時代弘安末年までの板碑は数少なく、市内では2基しか発見されていない。この板碑は中型の大きさであるが、彫りは薬研彫りで深く見事である。下部を欠失しているものの、残存部は傷みも少なく保存状態は良好である。

寺伝によれば、この板碑は江戸時代前期に西福寺と合併した円福寺跡から出土したという。西福寺の西方200mほどの場所である。西福寺・円福寺とも元は一向宗であったものを、室町時代末期頃に日蓮宗に改宗したと伝える。この伝承の真偽はともかく、板碑は日蓮宗改宗前のものであり、郷土資料としての価値も大きい。

板　碑　ミニ知識

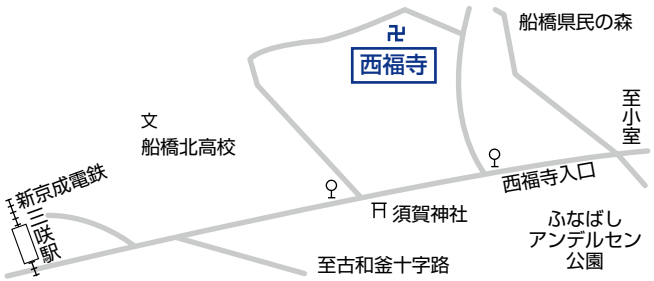
板碑の起源にはいろいろな説があるが、卒塔婆の性格を持った石造の板状の供養塔で日本独特のものである。

13世紀初頭から17世紀初頭にかけての約400年間に造られたとみられる。石材として緑泥片岩（青石）を用いる武蔵型板碑と、砂岩や黒雲母片岩を用いる常総系（下総型）板碑、手近な自然石を用いたものなどがある。船橋市内では100点余りが確認されており、全て武蔵型である。武蔵型板碑は秩父地方で産出された緑泥片岩を使ったものが多く、埼玉県を中心に関東地方に数多く分布している。板状で頭部が三角に尖って二条線が入り、梵字や図像の主尊を配し、紀年銘や銘文が刻まれていることが多いといった特徴を持っている。

（案内）

ＪＲ船橋駅北口または新京成電鉄三咲駅からバスで「西福寺入口」下車徒歩約13分。

※「木造毘沙門天立像」（24ページ）も同じ場所にあります。



板碑（康永四年二月在銘）

所在地　船橋市薬円台4丁目25番19号（船橋市郷土資料館）

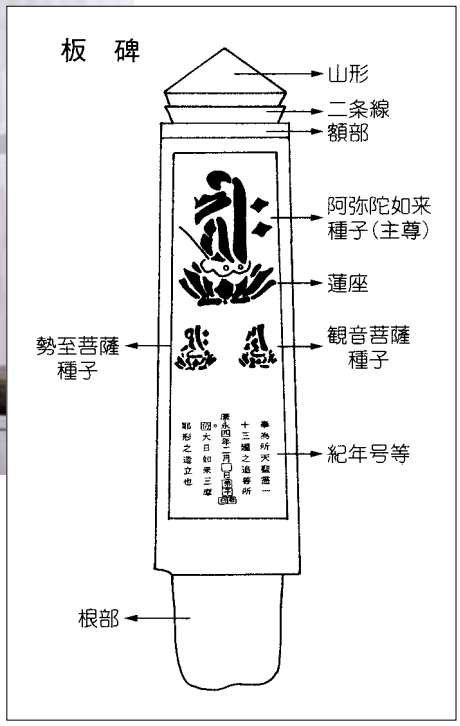
所有者　個人

『船橋市史　前篇』によれば、この板碑は光明寺の旧所有地に建てられていたが、昭和42年（1967）に本堂裏の墓地に移され、その後現在は、船橋市郷土資料館にて展示されている。

縦210.5cm、幅46cm、厚さ6cmの武蔵型板碑である。

上半部には阿弥陀三尊の種子〔キリーク（阿弥陀）サ（観音）サク（勢至）〕を各々蓮座にのせて配し、その下部中央に康永4年（1345）2月□日の北朝年号と、その左右に4行27文字が陰刻されている。刻文から推定して、この板碑は13回忌の追善供養のために供養塔として建てられたものである。板碑の造立者については不詳だが、「弟子敬白」の読みが正しいとすると、かなりの規模の寺院、あるいは土豪の存在を想定することもできる。

武蔵型板碑は、材料を埼玉県秩父郡荒川や比企郡都幾川の辺りから運んできたものであるから、千葉県には巨大なものがほとんどない。この板碑は、大きな板碑の少ない千葉県内では最大の部に属する。



阿弥陀三尊種子板碑

（案内）

新京成電鉄習志野駅から徒歩約10分。
ＪＲ津田沼駅北口から自衛隊方面行きバスで、「郷土資料館」下車。

（連絡先）船橋市郷土資料館
TEL ０４７－４６５－９６８０

瑞花双鳳五花鏡・梅花文鏡筥（残欠）

所在地　船橋市薬円台4丁目25番19号（船橋市郷土資料館）
所有者　船　橋　市

瑞花双鳳五花鏡　〔鏡背〕

瑞花双鳳五花鏡〔鏡面〕
青銅製
面径11.8cm　重量240.7g
12世紀前半
印内台遺跡群出土

印内台遺跡群は、船橋市を代表する古代（古墳時代、奈良・平安時代）～中世の遺跡で、船橋市西部の台地上（印内1・2丁目、西船2～4丁目）にひろがっている。

平成12年（2000）、印内2丁目280他で印内台遺跡群（27）の発掘調査が行われ、12世紀頃につくられた土坑墓（穴を掘って直接、遺体を埋葬した墓）から、「瑞花双鳳五花鏡」と「梅花文鏡筥」が出土した。鏡は筥に納められており、脇を下にして手足を折り曲げた姿勢（側臥屈葬）の遺体の脇に添えられていた。

和鏡を副葬する墓は日本全体でおよそ100例ほど発見されているが、関東地方は近畿地方、北九州地方と並んで分布が集中している。なかでも千葉県は数が多く特徴的である。このような埋葬習慣は、9世紀頃に平安京（京都）にはじまり、次第に地方の有力者に広まっていったと考えられている。船橋市では中世前半（12～13世紀）の資料が極めて少なく、これらの資料は当時の市域の有力者の動向を窺うことのできる、貴重な歴史資料でもあるといえる。

瑞花双鳳五花鏡　鏡は、弥生時代に日本に入ってきてから長らく、中国から輸入されていたが、平安時代になると日本独自の「和鏡」が生み出された。五花鏡は、奈良時代の唐式鏡（輸入した唐の鏡と、それをもとにしたり、真似たりして日本でつくった鏡）から平安時代の和鏡に移り変わる時期に、我が国で生み出された独特の鏡式で、梅花をかたどったものといわれている。

鏡は、姿を写して見る面を「鏡面」とよび、その裏面である「鏡背」に文様がある。この鏡の文様は「瑞花双鳳文」である。鏡は、一般的に、文様名と鏡式名を組み合わせて名前がつけられているので、この鏡は「瑞花双鳳五花鏡」とよばれる。

文様は、中心にある鈕（上下に貫通した穴に紐をとおして使う、つまみ）の左右に二羽の鳳凰（想像上のおめでたい鳥[＝瑞鳥]）、上下に瑞花（想像上のおめでたい花）を置き、その外側には、鏡の形にあわせて５つの飛雲文のようになった唐草文（異国の植物の文様）を配置している。鈕は、まわりに花弁（花びら）がめぐる「花形座鈕」である。これらの文様の特徴から、この鏡は12世紀前半に制作されたと考えられる。この鏡は五花鏡のなかでも、鋳造、仕上げともに良好な、優品である。さらに、五花鏡そのものが数が少なく貴重であるが、それに加えてそのほとんどが当時の使用状況から切り離された伝世品（代々伝えられてきたもの）であるのに対して、この資料は発掘調査により出土した珍しい例である。当時の人々が思いをこめて遺体に添えた状況を発掘調査で記録したことで、いわばタイムカプセルの役割を果たすことに大きな学術的意義がある。

梅花文鏡筥
木製
縦10.4cm　横11.2cm　最大厚0.7cm

梅花文鏡筥　もとは円形の蓋と身が組み合う合子状の筥であったと思われるが、鏡と密着していた蓋の一部だけが奇跡的に残った。木製漆塗の筥で、蓋の表には梅花文が20点ほど散らされている。このような種類の文様は、11世紀後半にはじまり、12世紀前半にたいへん流行していることから、この筥は12世紀前半頃に制作されたと考えられる。梅花は、はっきりと２種類が表現されている。中を塗りつぶした円形の花弁（花びら）を持つ梅花を蓋の中央に、その外側の左右に、輪郭線だけの水滴形の花弁の梅花を対称的に配置しており、巧みである。

これらの文様には、鉛白が用いられているが、類品は平安時代の漆工品では今までほとんど知られておらず、螺鈿（光輝く貝の一部を薄くとり、様々な形に切り取って、漆器などの面にはめ込む装飾）の代用とも考えられる。

漆塗りの方法は極めて特徴的である。人目にさらされることが少ない蓋の裏は、木地に直接、黒色の漆（油煙などの炭化物を混ぜて黒くした漆）を塗っただけの簡略なものであるが、表は鉱物粒子で下地を施し、黒色の漆に更に漆を塗り重ねており、丁寧である。このように漆塗りの工程は、古代の高級品と比べれば、かなり簡略化されているが、中世の普及品のような、漆の代わりに柿渋を使用した見かけの漆塗りではない。

このような漆塗り工程や文様の技法的特徴は、古代の高級品から中世の普及品への過渡的な特徴をよく示しており、漆工史上、たいへん重要な資料であるといえる。

以上のように、これらの資料は、船橋の歴史を知る上だけにとどまらず、考古学や工芸史でも注目を浴びる、重要な資料であるといえる。なお、五花鏡と、当時それを納めた筥がともに現存する例は、現在二例のみが知られており、極めて貴重である。

（案内）

新京成電鉄習志野駅から徒歩約10分。
ＪＲ津田沼駅北口から自衛隊方面行きバスで、「郷土資料館」下車。

公開については郷土資料館にお問い合わせください。（問い合わせ先）船橋市郷土資料館TEL ０４７－４６５－９６８０

齋藤その女等奉納句額

所在地　船橋市三山５丁目20番１号
所有者　二宮神社

この句額は、文久３年（1863）に、大穴の齋藤その女、田木ノ井（田喜野井）の鍬賀、正伯（薬円台）の林中など、三山近在の俳人たちが主催者になり、選者に当時有名だった江戸の俳人孤山堂卓郎などを迎え、二宮神社に俳句の額を奉納したもので、神社拝殿内の正面に掲げられている。その女は主催者中の最長老として「八十二老その女」と刻まれている。俳句の奉納者は、二宮神社の注連下21ヶ村の村民や、江戸・市川の者など80名である。

天地が107cm、左右が376cmのケヤキの一枚板で、江戸の工人野川法眼平朋郷が装飾し彫刻した立派なもので、文久３年の年月が入っている。おそらく、千葉県内では、これだけぜいたくな句額は他に見ることができないだろうと思われる。俳人その女の優れた人柄と足跡を物語る資料としても貴重である。

その女については、大穴北の西光院にある墓所（「俳人齋藤その女の墓」53ページ参照）が史跡に指定されている。

句額の一部（平成９年度修復）

（額の句の一部）
○　汲てゆく　跡も濁らぬ　清水かな　　鍬　賀
○　風よりも　涼しき庵よ　もりのうち　　林　中
○　春もまだ　冴てなのみぞ　庵の月　　その女
○　移る燈の　雨にながるる　柳かな　　卓　郎

（案内）

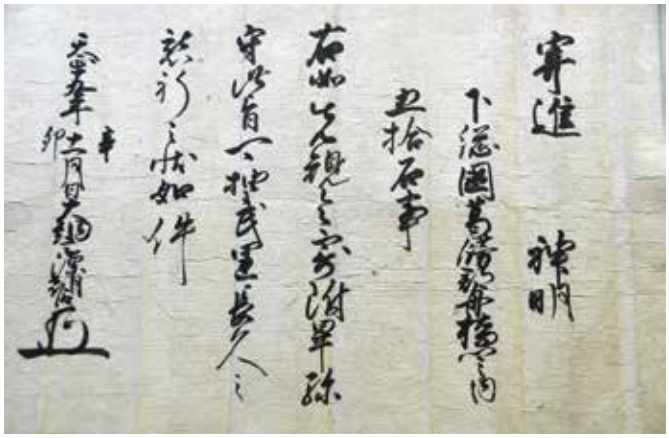
ＪＲ津田沼駅北口から二宮神社行きバスで終点下車。

見学する際は事前の連絡が必要です。

（連絡先）二宮神社　TEL ０４７－４７２－１２１３

徳川家康寄進状、徳川将軍朱印状
附　東照大権現像、葵紋箱

所在地　船橋市宮本５丁目２番１号
所有者　意富比神社（船橋大神宮）


徳川家康寄進状（天正十九年）※ 422㎜×650㎜

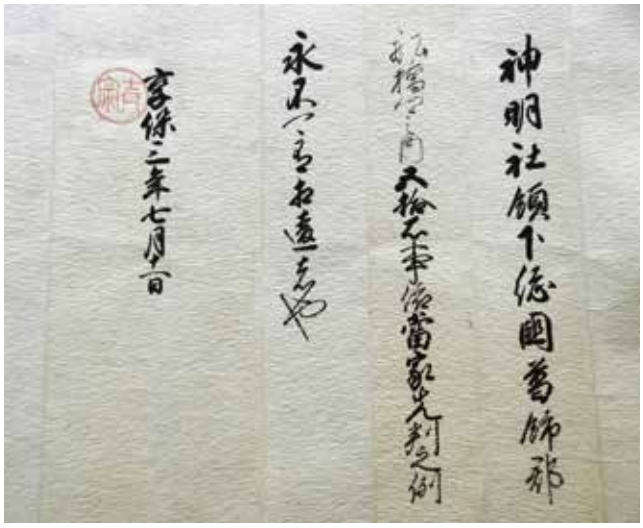
徳川秀忠朱印状（元和三年）※ 451㎜×615㎜

天正18年（1590）7月に豊臣秀吉は北条氏を降して関東を平定すると、同年8月に徳川家康は駿府から関東に移封され、江戸城に入った。徳川家康が意富比神社（船橋大神宮）に「下総国葛飾（飾）郡舟（船）橋郷之内五拾石」の社領を寄進したのは、その翌年天正19年11月であった。以後元和3年（1617）に第2代徳川秀忠、寛永13年（1636）に第3代徳川家光、寛文5年（1665）に第4代徳川家綱、貞享2年（1685）に第5代徳川綱吉より、いずれも家康が船橋郷の内の五十石の社領を意富比神社に寄進した「先判の旨」や「先判の例」に相違ないという朱印状が与えられた。

その後将軍職の在任期間が短かった第6代徳川家宣、第7代徳川家継、第15代徳川慶喜から朱印状は出されていないが、享保3年（1718）の第8代徳川吉宗から万延元年（1860）の第14代徳川家茂に至るまでの歴代将軍は、「当家先判の例」により、引き続き五十石は意富比神社の社領に相違ない旨の朱印状を出している。

このように徳川家康が関東に移封されて以降、徳川将軍と意富比神社には深いゆかりがあった。

また鷹狩りを行うなどの際に、徳川家康や徳川秀忠、徳川家光が船橋に訪れ、現在の本町四丁目にはその時に宿泊・休憩した「船橋御殿跡（市指定史跡、54頁参照）」


徳川吉宗朱印状（享保三年）※ 470㎜×650㎜

がある。さらに「船橋浦漁業関係古文書類（市指定有形文化財、32頁参照）」には船橋浦が幕府に魚介を献上する御菜浦（おさいのうら）であった等の記述があり、船橋は徳川将軍と縁のある土地柄であったことがうかがわれる。

こうした土地柄であり、かつ古より現在まで広く人々の信仰を集めている意富比神社に、徳川将軍ゆかりの資料がまとまって残されていることは、極めて歴史的価値が高いといえる。

［東照大権現像］

東照大権現像は掛軸で２幅残っており、いずれも絹本着色画（けんぽんちゃくしょくが）である。一方は家康公72歳の姿を、もう一方は42歳の姿を描いたものとされている。

作者、制作年代はともに不詳である。

[葵紋箱]

寄進状及び朱印状が納められた箱は木製漆塗り紐付き箱で、蓋の表には2つの三つ葉葵紋が描かれている。また東照大権現像は一幅ずつの箱に納められており、各々の箱に、葵紋が付されている。

東照大権現像 ※ 922㎜×383㎜
（伝 徳川家康72歳）

［指定文化財の内訳］

・徳川家康寄進状１通。
・徳川将軍朱印状11通。
・東照大権現像２幅。
・葵紋箱３箱。

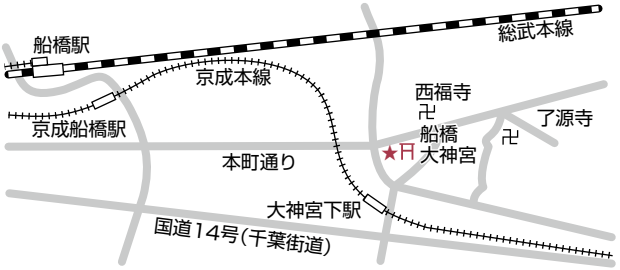
葵紋箱 ※（外寸）縦183㎜×横558㎜×高120㎜

東照大権現像 ※ 1295㎜×583㎜
（伝 徳川家康42歳）

（案内）

ＪＲ船橋駅から徒歩約18分。
京成大神宮下駅から徒歩４分。

現在は非公開となっております



八十八ヶ所札所大絵馬

所在地　船橋市飯山満町1丁目581番
所有者　能満寺
所在地　船橋市高根町1226番
所有者　観行院

八十八ヶ所札所大絵馬　能満寺

四国八十八ヶ所遍路は、弘法大師空海が四国の山野をめぐって修行したという伝承にちなみ、88ヶ所の霊場を巡拝するもので、室町時代頃から始められたという。巡礼の目的は心願成就、先祖や親の供養、極楽往生など様々で、仏教と民間信仰が結合して今日見られるような遍路習俗が成立したと考えられる。江戸時代になると一般の民衆にも広がり、非常に盛んになった。

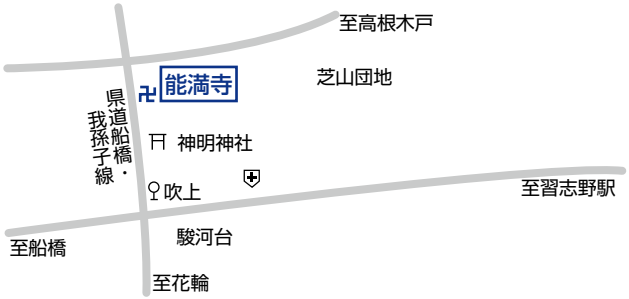
このように四国巡礼が一般化すると、「新四国八十八ヶ所」と呼ばれる霊場が各地に設定されるようになり、身近な霊場として盛んに信仰された。地域によっては独自の“講”をつくり、巡礼を行ったもので、現在でも多くの巡礼を集めている霊場もある。千葉県では北西部地域だけでも10余の講があったことが確認されている。

船橋市にかかわる霊場としては、船橋西部から市川・松戸にかけての葛飾大師と、船橋・八千代・習志野・鎌ヶ谷・白井にまたがる吉橋組八十八ヶ所霊場の二つがある。吉橋組霊場は吉橋組大師講が運営し、春秋２回５日間にわたって遍路が行われていた。

（案内）－能満寺－

ＪＲ船橋駅または東船橋駅から船橋グリーンハイツ行きバスで「吹上」下車徒歩約10分。

見学する際は事前の連絡が必要です。
（連絡先）能満寺
TEL ０４７－４２２－４５１０



飯山満町１丁目（下飯山満）の能満寺と高根町観行院はともに真言宗豊山派の寺院で、それぞれ吉橋組大師講の札所となっており、札所の配置と順路を描いた扁額形式の大絵馬が一面ずつ奉納され、保存されている。能満寺に奉納されているものは縦71cm、横89cmで、杉の三枚板に彩色で描かれている。八十八ヶ所の寺堂を描き、「一番　吉橋　釈迦堂」「十二番　下飯山満　能満寺」というように、札所の番次、地名、寺社名が書き込まれている。

八十八ヶ所札所大絵馬　観行院

それぞれの寺堂は同一の様式で描かれているが、能満寺だけには礼拝する男女２人が描き添えられている。剥落により、全部を読み取ることはできないが、画面中央に小金下野牧の野馬土手と４ヶ所の木戸、７頭の馬が描かれている。また、画面の左下には、「本所竪川三ツ目　徳右衛門町二丁目芋屋定右衛門」「修繕五月一日」と書かれている。画風・技法などから、江戸時代末から明治頃の製作と推定される。

高根町の観行院に奉納されているものは、縦71cm、横99.6cmで、杉の三枚板に彩色で描かれている。札所八十八ヶ所のうちの八十六ヶ所について、円内に能満寺同様「十五番　高根　観行院」というように札所の番次、地名、寺社名を書き込んでいる。また、小金下野牧の放牧馬の姿のほかに海老川とその支流、さらに桑納川と花見川も描かれており、高根、船橋大神宮、二宮神社などの特色を持つ土地については特別に風景が描きこまれている点で能満寺のものと異なる。

画面の右下には「當所　染井太郎兵衛　再拝謹掛所」「慶応三丁歳　孟秋令日」とあり、この絵馬が慶応3年（1867）に奉納されたことが明らかである。

この種の資料で、小金下野牧の状態を描いたものは従来知られていない。この二つの絵馬は、簡略ではあるとはいえ、近世末の小金下野牧の様相の一端を示す貴重な資料を提供している。また、船橋市域にかかわる代表的な民間信仰である吉橋組大師講の霊場について、当時の状況を具体的に示す資料としても貴重なものである。

（案内）－観行院－

ＪＲ船橋駅または東船橋駅から船橋グリーンハイツ行きバスで「高根小前」下車徒歩約10分。

見学する際は事前の連絡が必要です。
（連絡先）観行院
TEL ０４７－４３８－８５３６

梯子乗りと木遣り歌

伝承地　市　内

伝承者　船橋鳶職組合　若鳶会

江戸時代、船橋でも江戸の町火消しにならって火消しが組織されていたらしいが、その起源はよくわかっていない。市内に江戸時代の纏が数本残っているとのことである。

明治27年（1894）、勅令によって近代的消防が組織されたが、この頃のものと思われる竜吐水が海神の三木屋にある。この頃になると、出初式はすでに行われていたが、木遣りはまだなかった。木遣り歌は、三木屋の小出三木蔵が東京で覚え、船橋の鳶職の間に普及させたといわれている。

ただ、木遣り仕事をするときには、御番所町（小岩）の鳶職の応援を得て行ったという。

木遣り歌と梯子乗りが正月に行われるようになったのは、５代消防組頭丸山留吉のときで、昭和10年（1935）以降のことである。丸山が辞めたあと一時中断していたが、戦後復興されて今日に至っている。

梯子乗りは船橋鳶職組合若鳶会の人達によって伝承されている。高さ３間半（約6.3ｍ）の梯子の上で、トオミ・カンタン・ウデダメ・キモツブシ・セガメ・サカサダイノジ・ホカケ・ツリカメなど12～13種類の妙技が披露される。また、木遣り歌は、通し５曲と端もの数曲が伝えられ、主に同組合親鳶会の人達によって歌われる。江戸の火消しの面影をよくとどめており、船橋と江戸の関係を知るうえでも意義があるとともに、県内では起源の古い部に属するものである。

現在、１月の出初式や７月のふなばし市民まつりなどでその技を見ることができる。

火消し　ミニ知識

火消しは江戸時代の消防組織で、最も整備されていた江戸には、定火消（幕府の職名で若年寄に属し、与力・同心が付く）・大名火消（大名への課役で、江戸の藩邸から出した火消）・町火消があった。町火消は町奉行の所管で、享保年間にはいろは組の組織が定められ、組ごとに頭取・頭・纏・纏持ち・梯子持ち・平人・人足の７階級があった。町火消は京・大坂その他の町にも設置された。

大仏追善供養

伝承地　　船橋市本町３丁目４番６号　不動院

伝承者　　船橋市漁業協同組合

船橋の海は、江戸時代初めから半ばにかけて幕府に魚介を献上する「御菜浦」とされた好漁場であった。元禄16年（1703）11月23日、大地震による海底地形の変化のため、幕府へ献上することは中止されたが、その後この漁場をめぐり、近隣（猫実・堀江・鷺沼など）の漁師たちとの争いが多くあった。

大仏追善供養は、文政８年（1825）正月28日（明治以降は２月28日）から毎年同じ日に行われていると伝えられています。供養が行われるのは本町３丁目の不動院にある石造釈迦如来坐像で、延享３年（1746）８月１日の津波によって溺死した漁師ならびに住民の供養のために建立されたものである。

とくに文政年間から行事が行われるに至ったのは、次のような出来事があったためである。文政７年（1824）、船橋村と猫実村（現在の浦安市）が専漁場の境界をめぐって係争中、猫実村と東宇喜田村（江戸川区）の漁船多数が一橋家（御三卿家）の幟を立てた船の指揮のもとに境界内に侵入し、これを妨げようとした船橋の漁師と激突した。このとき、船橋の漁師が一橋家の幟を奪い、同乗していた侍を殴打したため、漁師総代３名が入牢させられ、うち２名が亡くなった。以来、漁師一同が１日休漁し、先の溺死者の霊とともに供養を行うことになったのである。死をもって専漁場を守った２名の総代に対する敬愛の念は切なるものがあったと思われる。

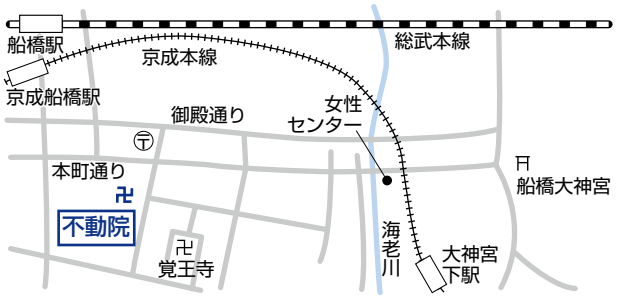
供養の日には、大仏（石造釈迦如来坐像）に白米の飯を盛り上げるようにつける。これは、牢内で食が乏しかったのを償うためとのことである。このような行事は全国的に珍しく、船橋の漁師町の歴史を示すものである。

なお、大仏の西側に漁師総代2名の墓碑も建てられている。

（案内）

ＪＲ船橋駅から徒歩約12分または京成電鉄京成船橋駅から徒歩約10分。

※大仏追善供養は毎年2月28日に行われます。



神保ばやし

伝承地　　船橋市神保町　須賀神社

伝承者　　神保ばやし保存会

神保ばやしが神保町に伝えられた時期はよくわからないが、八木が谷に伝わる深川ばやしを江戸時代末期から明治時代初め頃に受け継いだといわれる。

神保ばやしの構成は、大太鼓１人、小太鼓２人、笛１人、鉦１人の５人である。曲は、はやし・しょうでん・しちょうめ・かまくら・おかざき（以前は、かんだまると呼んだこともある。）の５曲からなり、かまくら・おかざきで「ひょっとこ」が登場、次いで「おかめ」が出て踊る。

曲目は、葛西ばやし、神田ばやしにも通じ、楽曲の基本様式にも共通性がある。なお、この地に定着して久しい間に、旋律の組み合せやリズム、テンポに神保特有の工夫が重ねられたようで、現在では、他の地方のものとは異なる郷土色を作り出している。リズムは簡潔で力強く、きめの細やかな旋律のひびかせ方がたくみに組み合わされて、神保ばやしとして特色あるものになっている。

地方によっていろいろな祭ばやしが伝えられ、工夫されているが、神保ばやしは地方的な特色がよくあらわれており、船橋の民俗芸能として貴重である。

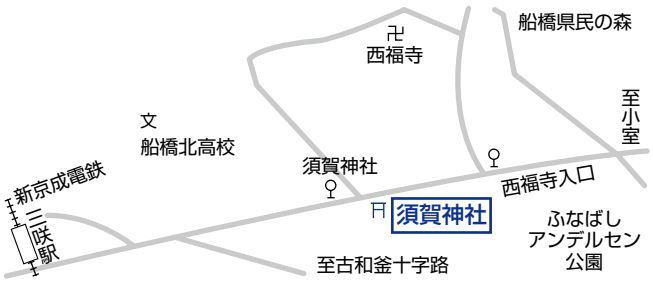
現在は、7月の第4土曜日（初ばやしは2月11日）に神保町須賀神社で演じられている。

（案内）

ＪＲ船橋駅または、新京成電鉄三咲駅から豊富・小室方面行きバスで、「須賀神社」下車。

（備考）

平成25年以降、休止しています。



船橋大神宮の神楽

伝承地　船橋市宮本５丁目２番１号　意富比神社（船橋大神宮）
伝承者　船橋大神宮楽部

田の神舞

⑥田の神舞、⑦蛭子舞、⑧恵比寿大黒舞、⑨山神舞

このうち、恵比寿大黒舞は節分祭でのみ演じられる。

使用する楽器は、舞楽に用いる楽太鼓と、締太鼓、笛で、各１人ずつが演奏する。現在大神宮で演じられる神楽の由来はよくわからないが、曲目の構成からみて、12曲を基準とする「十二座神楽」の系統であると考えられる。蛭子舞のように海に関係の深い曲目が大切にされていることも、船橋が江戸湾に臨んでよい漁場をひかえた土地であったことに関連した特色であるといえる。

平安時代の書物である『三代実録』には「下総国意富比神」の名が出ており、『延喜式』の神名帳にもその名がある。この意富比神は現在の船橋大神宮のことと考えられている。

神楽は境内の神楽殿で元日、１月３日、節分、10月20日の例祭、12月の二の酉等で演じられる（４月３日の船橋漁港の水神祭でも行われる）。伝えているのは大神宮楽部の人達で、現在は地元の人によって構成されている。

現在伝えられているのは次の９座である。

①みこ舞、②猿田舞、③翁舞、④知乃里舞、⑤天孤舞、

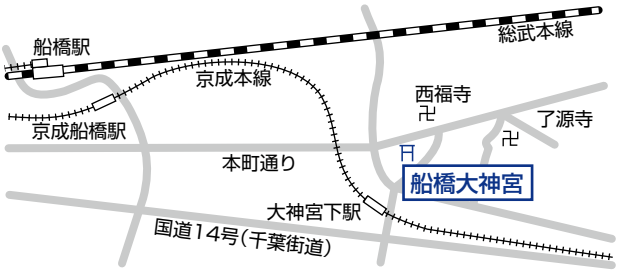
神　楽　ミニ知識

「かむくら（神座）」が転化してかぐらになったという。宮中で行われる神楽は一種の舞楽で、通常見る神楽とは区別される。ここでいう神楽は神社の祭礼などで演じられる、いわゆる「里神楽」である。里神楽は江戸から関東各地に広まり、各地で独自に発展した。千葉県内各地の神楽も江戸時代半ばから後期にかけて他の地方から伝わったものが多い。里神楽では『天の岩戸』『八岐のおろち退治』など神話に題材をとった曲や、能・歌舞伎に影響を受けた曲も演じられる。神楽に分類される芸能の種類は多く、神事を中心としたものから芸能の面が強いものまでさまざまである。

（案内）

ＪＲ船橋駅から徒歩約18分。

京成電鉄大神宮下駅から徒歩約４分。



二宮神社の神楽

伝承地　船橋市三山5丁目20番1号　二宮神社

伝承者　二宮神社神楽はやし連

三山にある二宮神社は、社伝によれば創建を弘仁年間（810～824）にさかのぼるという古社である。昔は注連下(氏子の区域)21ヶ村とも23ヶ村ともいわれ、現在の船橋市東部、八千代市西部、習志野市、千葉市西部にまたがる地域が含まれており、船橋市東部の代表的な神社である。

かとり舞

二宮神社の神楽がいつ頃から伝えられているのかはよくわかっていないが、古い装束のなかには、墨で「寛政十一未歳」(1799)「天保八酉年」(1837）と記されているものも保存されている。

神楽は、1月15日と10月16日（例祭）に境内の神楽殿で、節分祭には社殿で演じられる。神楽はやし連を構成しているのは地元の三山の人達である。

現在伝えられている曲目は次の16座である。(名称は通称で記している。)

①みこ舞、②翁舞、③猿田舞、④神明舞、⑤天狐舞、⑥うずめ舞、⑦ひりこ舞、⑧おかめ舞、⑨宝剣打ち、⑩かとり舞、⑪源三位（ぬえ退治)、⑫玉取舞、⑬山神舞（餅なげ)、⑭大黒舞、⑮獅子舞、⑯鬼の舞（⑭⑮⑯の舞は節分祭でのみ演じられる。)

このうち、翁舞・猿田舞・神明舞は三座といって特に重要であるとされ、また、かとり舞と源三位（源頼政のぬえ退治）は市内ではここだけに伝わる独自の曲目である。ひりこ舞では道化役の蛸が登場して観客の笑いを誘う。

使用する楽器は、おおなり（鋲打太鼓)、鼓（締太鼓)、笛、しゃんぎり（チャッパ）で、各1人ずつが演奏する。(下座と呼んでいる。)

他の地域に伝わる神楽と共通する曲目も多く、基本的には、関東地方に広く伝えられている十二座神楽に属するものであるが、神に奉納する神事という厳粛な面と、祭礼における娯楽性という面をあわせもっている。長い間に独自の演出や工夫が加えられて、特色あるものになっている。

(案内)

ＪＲ津田沼駅北口から二宮神社行きバスで終点下車。

高根町神明社の神楽

伝承地　船橋市高根町600　神明社

伝承者　高根町神明社神楽連

天の岩戸舞

神明社は高根の鎮守で、旧高根村の集落の南のはずれに位置している。

神楽は、元日（午前）、5月1日（夜）、10月15日の例祭（夜）に、境内の神楽殿で演じられ、元日の午後は船橋大神宮で、10月24日の夜には、高根町の秋葉神社の例祭でも奉納される。神楽を伝えているのは高根町神明社神楽連で、地元の高根の人達で構成されている。

この神楽は、明治時代の初めに風早（柏市、旧沼南町）の塚崎神明社より習ったと伝えられてきたが、「歴代神楽連名簿」が見つかってその伝承が裏付けられた。記録によれば、最初の奉納は明治6年（1873）である。

現在演じられている曲目は次の14座である。

①神子舞、②猿田彦命舞、③湯笹舞、④日本武尊舞、⑤鈿女之舞、⑥剣打ち之舞、⑦玉取り之舞、⑧大蛇之舞、⑨神明之舞、⑩恵比寿舞、⑪天狐の舞、⑫翁舞、⑬ぎおん舞、⑭天の岩戸舞

このうち、日本武尊舞・大蛇舞は、市内では高根だけで演じられている独自の曲目で、日本武尊舞ではヤマトタケルが女装してクマソを討つ場面が、また、大蛇舞ではスサノオノミコトの八岐のおろち退治の場面が演じられる。なお、天の岩戸舞は10月15日の例祭でのみ演じられる曲目で、岩戸の場面でともされているロウソクを妊婦がもらって帰り、お産のときにともすと出産が軽くすむという言い伝えがある（ロウソクは短いほどよいとされる）。神子舞は、市内のほかの神楽では面をつけない直面で舞うが、ここでは面をつけて舞う。使用する楽器と演奏者の人数は、大胴（鋲打太鼓）1人、台拍子（締太鼓）1人、笛3人である。

鎮守の森に囲まれた神楽殿で夜行われる神楽には、厳粛な雰囲気とともに、五穀豊穣と村の安全を願ってきた高根の人達の気持ちが込められている。

（案内）

ＪＲ船橋駅北口から船橋グリーンハイツ行きバスで「高根小学校前」下車徒歩約15分。

飯山満町大宮神社の神楽

伝承地　船橋市飯山満町2丁目843番　大宮神社

伝承者　大宮神社神楽楽人

神功皇后

大宮神社は旧上飯山満村高野の鎮守で、集落の東のはずれに位置している。

神楽は1月7日の七草（夜）、10月23日の例祭（夜）に境内の神楽殿で演じられる。神楽を伝えているのは、氏子からなる大宮神社神楽楽人の人達である。

神楽の始められた年代ははっきりわからないが、谷津の本郷（習志野市谷津）から伝わったといわれている。その後、一時期途絶えていたが、村に不幸があったときに再度谷津から習って復活したという。市内のほかの神楽と同様に古い面や装束などが大切に保存されているが、その中に次のように墨書されているものがある。「文久三癸亥年（1863）九月吉祥日奉納　近藤四郎左衛門」と裏側に墨書された大黒の頭巾。「當時　安政六己未年（1859）九月吉良日　近藤四郎左衛門事園十郎製造　明治廿五壬辰年（1892）ニ至ル　三拾六ヶ年経過ス比時即　右仝 人修覆製作ス」という墨書の箱書きのある鳥兜の箱。これらからみると、江戸時代末期にはすでに演じられていたようである。

現在演じられている曲目は次の12座である。

①みこ舞、②天狗（猿田彦）、③八幡太郎（知之利）、④うすめ、⑤こかじ（住吉舞）、⑥翁、⑦神明（種蒔き）、⑧きつね（天狐）、⑨神功皇后、⑩ひょっとこ、⑪いびす様（蛭子）、⑫鬼・鐘馗（山神）

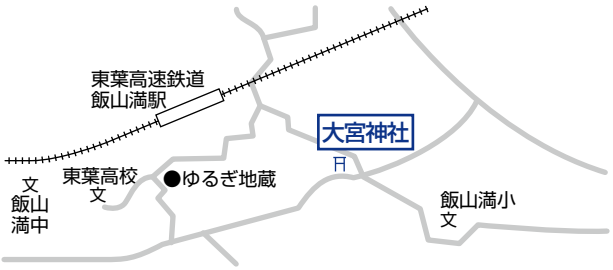
このうち、神功皇后は市内では大宮神社だけで演じられている曲目である。

使う楽器と演奏者の人数は、大太鼓（鼓打太鼓）1人、小太鼓（締太鼓）1人、笛3人である。

古くから村が成立していたといわれ農業が盛んであった飯山満の地で、独自の工夫を加え、五穀豊穣を願い豊作に感謝して伝えてきた特色ある神楽である。

（案内）

東葉高速鉄道飯山満駅から徒歩約10分。



中野木の辻切り

伝承地　　船橋市中野木１丁目

伝承者　　中野木町会

八坂神社本殿前に据えられた大蛇

辻切りは村境の「辻」を「切る」ことにより、悪霊や悪疫が村内に入って来ないようにする行事である。名称、形態、時期などは地域により様々であるが、中野木では毎年初午（２月最初の午の日）に、藁で作った大蛇を木にかける。

行事に参加するのは中野木の農家・旧農家24軒ほどである。東西の２組に分かれ、大蛇を１匹ずつ制作する。東が雌、西が雄ということになっている。また、各家の門などにかける藁の小蛇も作られる。材料は、頭と胴体にする藁、大蛇の尾とする樫の棒、目玉を作る半紙・抹香・墨汁、頭や胴体に付ける柊・杉葉・樫の小枝・篠竹などである。半紙は神札とクジ（墨で縦横に数本の線を引いたもの）にも使われる。当番（年番）の４軒が用意しておく。

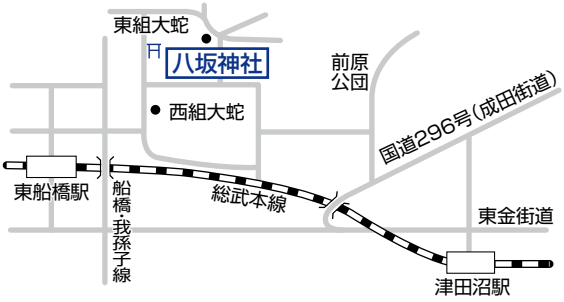
年番は午前中から鎮守の八坂神社に集まり、目玉や尾などの部分を作って準備する。昼過ぎに各家から人々が集まり、社務所内でまず大蛇の頭を作り、次に胴体を作る。完成すると長さ５ｍ半ほどになる。とぐろを巻いた形で本殿の前、東組は向かって左、西組は右に、向かい合わせに据え、御神酒を呑ませる。小蛇は本殿の回縁に並べられる。直会のあと、西組、東組の順にそれぞれ４～５人で大蛇を脇に抱え、南西と北東の入り口に向かう。途中お別れと称し、２匹の大蛇の口を合わせる。到着すると前年の大蛇を立木から取り除き、新しい大蛇を巻き付けて固定する。ここで解散し、後は各家で小蛇をかけ、すべてが終了する。

起源については不詳であるが、中野木の辻切りはワラ蛇のつくりが大きく、古くからのかたちを伝えていると考えられる。貴重な民俗行事の一つである。

西組の大蛇（雄）

（案内）

ＪＲ東船橋駅から徒歩約14分。



観信の墓 附 木造地蔵菩薩坐像

所在地　船橋市薬円台1丁目1番　高幢庵

管理者　木っぱ地蔵保存会

観信は江戸時代の木食行者の一人で、薬円台に高幢庵を開き、この地で享保11年（1726）に没している。ここに墓石と位牌があるほかは、観信についての伝記は知られていない。墓は高さ約130cmの棹石で、「開山権大僧都理性院阿闍梨木食観信　享保十一丙午歳七月」と刻まれている。しかし、位牌には「権大僧都阿闍梨理性院木食観信不生位　享保十一丙午天八月六日」とあり、没年の月日に違いがみられる。寛延2年（1749）の『葛飾記』には高幢庵についての記事がある。そこには高幢庵の路傍に木造の地蔵菩薩像のあること、その作者が木食僧であることが述べられている。その頃には近在で有名になっていたようである。

観信の墓

木造地蔵菩薩坐像

地蔵菩薩は木を一木のまま荒々しく削りとって作った、力強く素朴な作風の像で、「木っぱ地蔵」と呼ばれている。久しく風雨にさらされて露仏となっていたためか状態が悪いが、現在は観信の墓のとなりの小堂に安置されている。

木食僧　ミニ知識

野草や木の実などを食べ、米や野菜を食べない修行（木食戒）をする僧、行者のことで、深山で厳しい修行を積んだ後に町や村（俗界）に現れて民衆に信仰を広めた。江戸時代には多くの木食行者が現れ、加持祈祷で病気を治したりし、民衆から生仏のように崇敬された。

木食は多くの仏像を刻んでおり、円空が有名である。

（案内）

新京成電鉄薬園台駅から徒歩約5分。

俳人齋藤その女の墓

所在地　船橋市大穴北５丁目３番１号　西光院墓地

管理者　西　光　院

その女の生家の齋藤安兵衛家は、松平氏知行所５ヶ村（大穴・古和釜・坪井・金堀・旧永治村白幡）の名主総代をつとめた豪農であった。同家は俳諧を好む風があって、その女も幼い頃からその影響を受けたようである。その女は天明元年（1781）頃の生まれで、10代から俳諧の道を志し、20代にはいくつかの句集に句が載せられている。当時有名だった江戸の俳人随斎叟夏目成美（浅草蔵前の札差業の主人で『随斎諧話』『成美家集』などがある）などから指導を受け、また、京坂地方に遊んだこともあって、広く諸国の俳人と交わった。天保７年（1836）には亡夫の７年忌に合わせて、西光院に供養塔を造立した。それには「極楽の鐘をかぞへて杜鵑」という句が刻まれている。（墓の隣り）

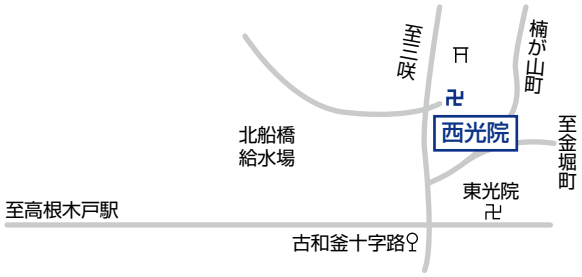
老境に入ってからは、有望な若手俳人を後援したり、自ら何人かの弟子に俳諧の指導をしたりしている。晩年のその女は神仏を篤く信心し、ある人が「ただ俳（俳諧）と仏との二筋に心をよせておのずから禅味を悟る」と評している。

文久元年（1861）春、その女の80歳のときに祝賀の会をひらき、秋には記念に『憑蔭集』という句集を作って関係者に配った。この句集には、巻頭に、親交のあった江戸の絵師の柴田是真が描いたその女の絵を載せ、交友のあった俳人達の句も多数収載されている。（西図書館に１冊収蔵）

その女は慶応４年（1868）正月28日に87歳（あるいは88歳）で死去した。墓石は、夫の没後にその女が建立しておいたと見られる唐破風付の豪華なものである。本市が生んだ著名な文化人を物語る史跡として貴重である。

（案内）

ＪＲ船橋駅または新京成電鉄北習志野駅からバスで「古和釜十字路」下車徒歩約10分。



船橋御殿跡 附 東照宮

所在地　船橋市本町４丁目29番12号（東照宮）

管理者　本町４丁目町会

東照宮

現在の本町４丁目の一角、民家の立ち並ぶ中に、船橋御殿の跡地といわれる場所があり、東照宮と稲荷神社の社殿が建てられている。このあたりは、小字にも「御殿地」の名が残っていた。船橋御殿跡と東照宮は、徳川家康と船橋の関係を物語る貴重な史跡である。

徳川家康は非常に鷹狩りを好み、上総東金周辺でも２度にわたって狩りを催した。東金にはそのために立派な御殿が造られ、その途次の船橋と中田（千葉市）にも、それぞれ船橋御殿と御茶屋御殿が造営された。慶長19年（1614）前後のことである。船橋御殿は土塁などの防御機能を備えた殿舎であったと考えられる。家康は、慶長18年（1613）12月に、翌正月上総東金で狩りをすると仰せ出し、正月７日に江戸を出発して東金に向かった。船橋大神宮の諸由緒書によれば、８日（７日とする書もある）に船橋御殿で小休止をしたとあるが、他にそれを裏づける史料は知られていない。翌元和元年（1615）11月25日、家康は東金からの帰途、船橋御殿に宿泊した。女房たちを伴い、また、警護の武士・足軽など数十人を従えた一行であった。このときは船橋北方の田野で鷹狩りを催したともいわれる。

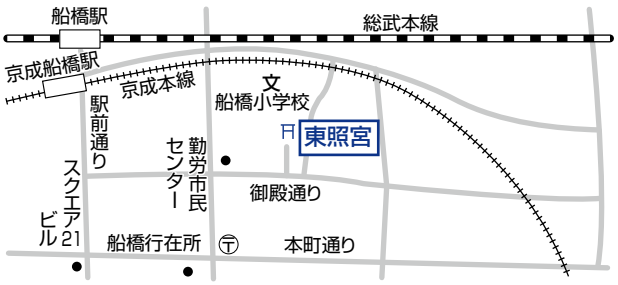
船橋御殿には家康のほか、秀忠が数回宿泊・休憩した。しかし、以後、東金での将軍家の鷹狩りは催されず、寛文11年（1671）に東金御殿は廃止されたので、同時期に船橋御殿も廃止されたものと想定される。

船橋御殿跡は、貞享年間（1684～88）に船橋大神宮神職の富氏に下げ渡された。そのときの検地面積は１町６反５畝24歩であったが、実際の御殿は土手敷も含めて３町歩（約3ha）余りあったと推定される。その後しばらくして、富氏は跡地の御殿中心部に、家康を祀る東照宮を建立した。

現在の社殿は、かたわらの記念碑によれば、安政４年（1857）に再建され、昭和２年（1927）に修繕されたものである。

（案内）

ＪＲ船橋駅から徒歩10分または京成電鉄京成船橋駅から徒歩約８分。



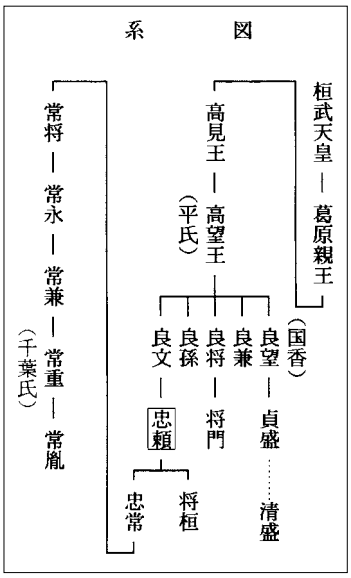
葛羅の井

所在地　船橋市西船6丁目4番5号

管理者　葛羅の井保存会

旧栗原本郷の葛羅の井は、葛飾明神の御手洗の井といわれ、明神の旧社地東下の古作道の路傍にある。平忠常の父忠頼の産湯を汲んだという伝説の井戸である。現在はコンクリートで固められた直径180cmほどの円い井戸で、昔はこの水脈が竜宮界まで通じているといわれ、いかなる日照りにも水の涸れることもなく、また、瘧疾（主にマラリアの一種）を患うものがこの井の水を飲めば治ると伝えられてきた。

文化9年（1812）、蜀山人大田南畝はこの地の惣四郎という人に頼まれて、「葛羅之井」を揮毫し、さらに銘文を撰した。この碑は今も残され、戦後、永井荷風が随筆『葛飾土産』で紹介したので、再び世に知られる存在となった。



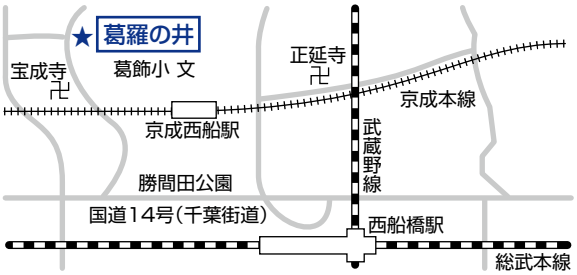
碑文	読み下し文
下総勝鹿　郷隷栗原	下総の勝鹿　郷は栗原に隷す
神祀瓊杵　地出醴泉	神は瓊杵を祀る　地は醴泉を出す
豊姫所鑒　神龍之淵	豊姫の鑒する所　神龍の淵
大旱不涸　湛乎維円	大旱にも涸れず　湛乎としてこれ円なり
名曰葛羅　不絶綿綿	名づけて葛羅と曰う　絶えざること綿綿たり
南畝覃撰	
文化九年壬申春三月建	
本郷村中世話人惣四郎	
（大田南畝については五十七ページ参照）	

（案内）

京成電鉄京成西船駅から徒歩約6分。

ＪＲ西船橋駅から徒歩約13分。

途中に、「成瀬氏の墓」（59ページ）のある宝成寺があります。



鐘楼堂跡 附 和時計 蜀山人筆

所在地　船橋市宮本7丁目7番1号　了源寺
所有者　了　源　寺

宮本の了源寺は、寺伝によれば天正年間（1573～92）、開基は釈伝翁と伝えられる古刹である。光雲山と号し、浄土真宗本願寺派に属している。

本堂の右後ろに小さな丘があり、享保年間（1716～36）、徳川幕府が大砲射撃を行ったときの鉄砲台の台座があったといわれる。ここから東方の谷津・藤崎方面の松林、原野に向けて試射を行ったのである。

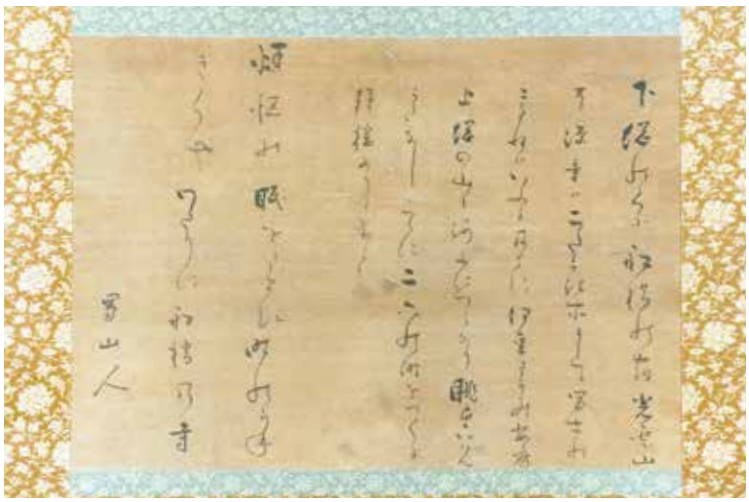
これを廃止した際、ときの代官小宮山杢之進の勧めで鐘楼堂を建て、幕府から「時の鐘」として公許され、明治4年（1871）に廃止されるまで、船橋一帯に時を告げていた。

鐘楼堂跡

この「時」の基準となったのがこの和時計で、了源寺に保存されている。時計は高さ48cm、幅16cmの真鍮製で、江戸時代中期（18世紀）の作といわれる。時刻は、半刻ごとに鐘を二つ鳴らす二挺天符で、指針は固定されており、文字盤が回るようになっている。動力は、重さが異なる二つの重錘（おもり）を利用し、鉄の鎖で二つの歯車を徐々に回す仕掛けになっている珍しいものである。当時は時計を「自鳴鐘」と呼んでいた。

また了源寺には、蜀山人大田南畝が船橋に宿泊したときに、この鐘の音を聞いて詠んだ、自筆の狂歌が掛け軸にして保存されている。

和時計



蜀山人筆　狂歌

下総のくに 船橋の宿 光雲山
了源寺ハ こだかき所にして 富士の
高ねはいふに及ばず 伊豆さがみ 安房
上総の山々 海上につらなり 眺望いはん
かたなしこゝに二六の時をつぐる
鐘楼ありときゝて

煩悩の眠をさます時のかね
きくやわたりに船橋の寺

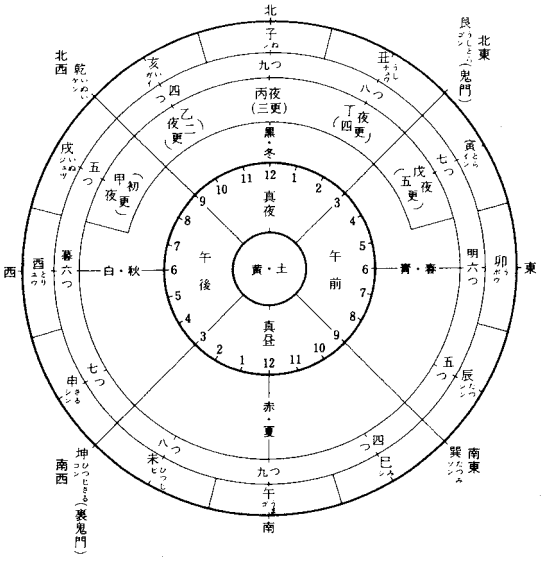
蜀山人

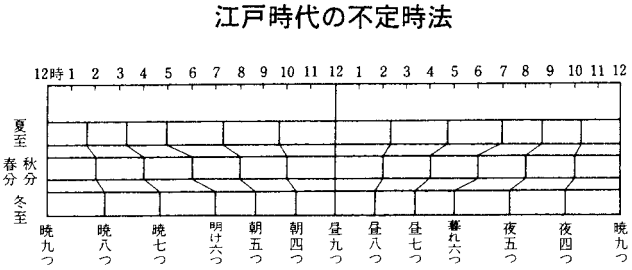
蜀山人　大田南畝　ミニ知識

寛延（かんえん）２年(1749)江戸牛込（うしごめ）に生まれた。本名は覃(ふかし)、通称は直次郎、後に七右衛門。幕府の下級武士だが、漢詩に関する著書などがある学者・詩人で、狂歌（きょうか）・洒落本（しゃれぼん）・黄表紙（きびょうし）などの作者としても活躍し、特に狂歌の三大家の一人といわれた。号は南畝、四方赤良、山手馬鹿人、蜀山人などである。酒が好きで、こんな逸話がある。ある時、弟子たちに深酒を戒められ、即座に禁酒を誓った。しかし、魚屋の持ってきた初鰹につられて一杯やり、弟子たちになじられると、『わが禁酒破れ衣となりにけり　さして下さい　ついで下さい』と書いたという。

文政（ぶんせい）6年(1823)没。

《参考》方位と時刻





※夏至・春分(秋分)・冬至の時刻を示したもの

江戸時代、民間で行なわれた時刻法は不定時法といい、夜明けと日暮を境として昼と夜とをそれぞれ六等分したが、季節により変動があった。

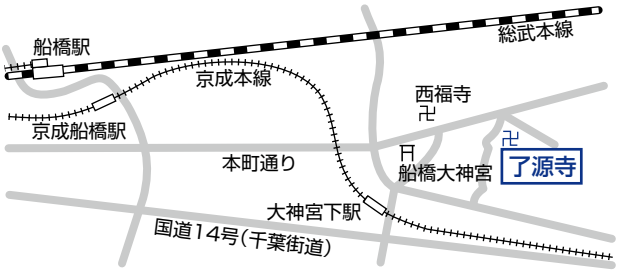
(案内)

京成電鉄大神宮下駅から徒歩約９分。

見学する際は事前の連絡が必要です。
(連絡先) 了源寺　TEL ０４７－４２２－４３５１

(備考)

天候により、蜀山人筆狂歌は見学できない場合があります。



習志野地名発祥の地　附 明治天皇駐蹕之処の碑

所在地　船橋市薬円台4丁目25番19号（船橋市郷土資料館）

所有者　船　橋　市

現在の習志野台・高根台の一帯は、かつて、小金原あるいは大和田原といわれ、江戸時代には幕府の牧（馬の放牧場）の一部であった。その後、明治7年（1874）から昭和20年（1945）までは、陸軍の演習地とされていたところである。

明治6年（1873）4月29日、明治天皇は、徳大寺宮内卿、西郷隆盛、篠原国幹ほか多数を従え、薩摩・長州・土佐の兵からなる四個大隊2800人の近衛兵を率いて、県下に初めて行幸された。ご通行の道筋には清砂を敷きつめ、辻々にはよしずを張って警戒し、奉迎者は道の両側で筵に座してお迎えしたという。その夜、天皇は、風雨の激しい中、原野の幕舎に野営された。天覧演習は翌30日に行われ、5月1日に皇居（赤坂仮御所）へ還御された。5月13日、天皇の勅諭をもって、この原に「習志野ノ原」の名を賜った。このことから、この辺りに「習志野」の地名が用いられるようになった。碑は仙台石製で、高さ3.9m、幅1.6m。裏面には、明治天皇がここに露営し、演習を統監されたこと、この地が演習に適すると認め、永く陸軍操練場と定めたということが記されている。（この碑は、習志野台4丁目のみゆき町会会館の脇にあったものを、船橋市郷土資料館の横に移転したものである。）

明治天皇駐蹕之処の碑

碑　文

明治天皇駐蹕之處
元帥陸軍大将公爵山縣有朋謹書

習志野之原在千葉縣下総國千葉郡曠野渺漠連小金原本無特稱明治六年四月二十九日　天皇率近衛兵親臨露営于此地櫛風沐雨統監演武認地形尤適練習五月十三日賜名習志野之原永定為陸軍操錬場習志野之原名稱昉於茲今謹記其縁由云
大正六年十月建　　陸軍大臣　大島健一

（案内）
新京成電鉄習志野駅から徒歩約10分。
ＪＲ津田沼駅北口から自衛隊方面行きバスで「郷土資料館」下車。

成瀬氏の墓 附 墓誌

所在地　船橋市西船6丁目2番30号
管理者　宝成寺

成瀬氏の墓

現在の船橋市西部、旧葛飾町一帯はかつて栗原郷といわれ、江戸時代に大名成瀬氏の領地があったところである。旧栗原本郷の宝成寺にある成瀬家の墓所は、船橋市内唯一の大名家関係の墓で、歴史的な価値が高い。

成瀬正成は徳川家康の側近の一人で、軍功を重ね、天正18年（1590）に家康が関東に移るとすぐに、栗原郷に4千石を与えられた。その後正成は、関ヶ原の合戦でも軍功があり、堺奉行などの職を歴任し、石高を加増されて大名に列した。家康の子義直が尾張徳川家を創設すると、そのお付家老として後見役に任ぜられ、元和3年（1617）には尾張犬山城主となった。正成は寛永2年（1625）、江戸出府中に没し、栗原本郷の宝成寺で荼毘に付され、後に日光に改葬された。

正成の死後、犬山城主は長男正虎が継いだが、正成は生前、次男之成に栗原4千石他を譲っていたので、之成が栗原藩の2代目となった。その後は、之成が寛永11年（1634）に39歳で没したため、わずか1歳の之虎が跡を継いだ。その之虎も4年後に5歳で夭折し、栗原藩成瀬家は断絶した。一方、犬山の成瀬家はその後も続き、明治時代には子爵となり、子孫が犬山城を所有していた。

宝成寺は、江戸における成瀬家の菩提寺とされていたので、栗原藩断絶後も一族の墓の一部が営まれ、明治9年（1876）までの墓碑が残されている。

成瀬之成と殉死者3名の墓

殉死者を副葬した大名の墓は非常に珍しい。

成瀬正寿の墓

正寿は第7代犬山城主で、天保9年（1838）江戸で死去した。棹石の高さ約3.6m、幅90cm、厚さ40cm余りで、県内では最大級の墓石である。このほかに之成夫人（片桐且元の娘）の墓、之虎の墓、正成夫人の墓などがある。

墓誌

昭和44年（1969）6月、第7代犬山城主であった成瀬正寿の遺骨を国元の白林寺に移すために墓石の下を発掘した。その際、縦70cm、横47cmの正寿の墓誌が出土した。また、その後、墓地の整理を行った際に、正寿の兄成瀬信濃守正賢の子である成瀬鍋吉の墓誌が出土した。これは縦33cm、横27cmである。

双方とも小松石製で、額縁型凹凸2面からなっている。四方の角は丸みを帯び、埋納する際に、地中に降ろしやすいようにつけたと思われる刻み目がある。

これら二つの墓誌は成瀬氏の墓と一体を成しており、史跡の裏付けとなる史料である。また、墓誌そのものの存在も非常に稀であり貴重なものである。

成瀬鍋吉の墓誌

身（凸型）

成瀬正寿侯の墓誌銘

身（凹型）

身（凸型）

成瀬正寿侯の墓誌

（表）

朝散大夫成瀬侯之墓

（裏）

従五位下朝散大夫犬山城主姓藤原氏成瀬諱正
寿俗稱隼人正世々尾之附庸人為輔相考浄翁入
道諱正典之第五子嫡母松平丹波守光慈之女而
生母家臣松岡氏天明二年十二月廿三日生于江
戸麹里之邸寛政十年戊午冬年甫十七謁見　尾
之明公十一年六月始出仕十二月奉謁
幕府大公二十八孝致仕継立娶大久保山城守忠
喜之女有一女俱先没以尾張臣塀和氏為側室有
三子長子正住今見奉職焉次子茂正季女某在家
今茲天保九年戊戌冬十月廿七日以病卒享年五
十有七越十一月七日葬于下総州葛飾郡栗原郷
宝成禅寺先塋之側　（配字とも原文のまま）

【訳文】

従五位の下、朝散太夫（官職名　徳望の高い人に贈られる）犬山城主、姓は藤原、氏は成瀬、諱（実名）は正寿、俗に隼人正と称し、世々尾の附庸（尾張の家臣）にして、入りて輔相（家老）となる。考（亡父）浄翁入道、諱正典の第5子なり。嫡母（公式の母）松平丹波守光慈の女（娘）にして、生母は家臣の松岡氏。天明2年12月23日江戸麹町の邸に生る。寛政10年冬、17歳、尾の明公（尾張大納言徳川氏）に謁見。11年6月初めて出仕、幕府大公（徳川将軍）に奉謁す。28歳、考、致仕（辞職）し、継立す。大久保山城守忠喜の女を娶り、一女あり。俱に先に没す。尾張の臣塀和氏を以て側室となし、3子あり。長子正住、今に見えて奉職す。次子茂正、季の女某、家に在り。今茲に天保9年冬10月27日病を以て卒す（亡くなる）。享年50有7、越えて11月7日、下総の州葛飾郡栗原郷、宝成禅寺、先塋（先祖の墓地）の側に葬る。

成瀬鍋吉の墓誌

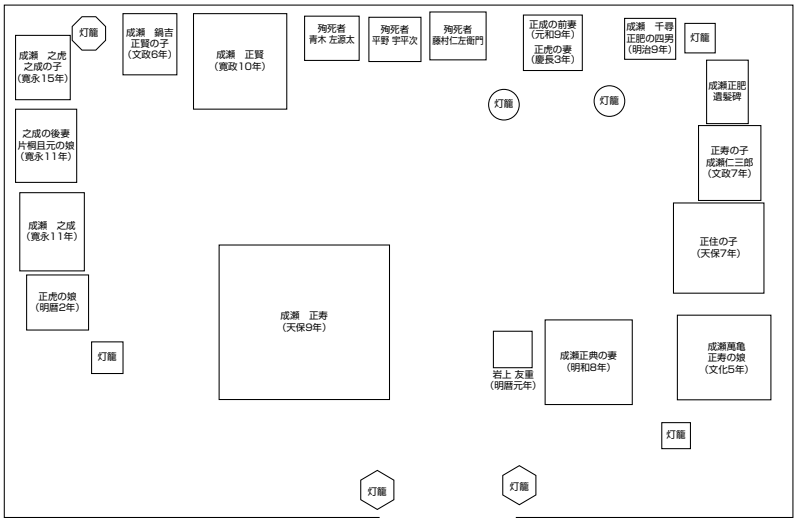
成瀬鍋吉藤原寿承以
文政六年癸未二月十
九日卒于東都享年二
十七矣法号興雲院殿純龍普潤居士廿二日
葬之宝成寺以隣于其
父信濃守正賢之墓

【訳文】

成瀬鍋吉、藤原寿承、文政6年2月19日を以て東都にて卒す。享年27歳。法号は興雲院殿純龍普潤居士。

日宝成寺に之を葬り以て、其の父信濃守正賢の墓に隣とす。

成瀬氏の墓　《墓石の配置図》



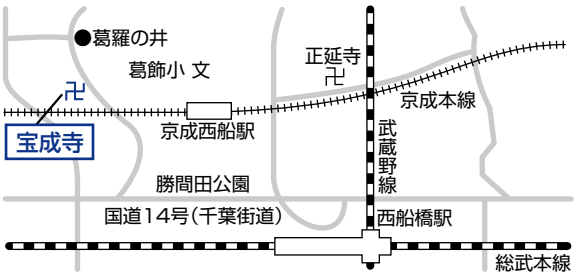
（案内）

京成電鉄京成西船駅から徒歩約４分。
ＪＲ西船橋駅から徒歩約13分。

墓誌を見学する際は、事前の連絡が必要です。
（連絡先）宝成寺
TEL ０４７－３３６－１７１１

（備考）

昭和46年3月5日　墓誌2基追加指定



飛ノ台貝塚（とびのだいかいづか）

所在地　　船橋市海神４丁目260番１ほか

所有者　　船　橋　市

飛ノ台貝塚は、船橋市立海神中学校とその周辺に広がる縄文時代早期後葉（約８千年前）の遺跡である。遺跡は標高12～15ｍの台地縁辺にあり、南側の城門川の谷に沿って、東西約700ｍ、南北約60～200ｍの範囲に広がっている。面積は約90,000㎡である。

この遺跡は、昭和７年（1932）杉原荘介氏により発見され、「千葉縣東葛飾郡葛飾町大字西海神字飛ノ臺に存する」ことにより、「飛ノ臺貝塚（とびのだい）」と名付けられた。昭和13年（1938）、東京考古学会の発掘調査によって「残灰を有する凹所群」が発見され、「炉穴（ろあな）」と命名された。飛ノ台貝塚は考古学史上「炉穴が初めて発見された遺跡」として有名である。

昭和52年（1977）から令和２年（2020）までに13回の発掘調査が行われ、縄文時代早期の住居跡21軒、小竪穴４基、墓坑１基、そして炉穴430基以上・貝塚40ヶ所以上等の多くの遺構が発見されている。遺物は縄文時代早期後葉の土器を主体に、石器など多数出土している。貝塚はハイガイを主にマガキ・ハマグリ・オキシジミなどの海水性の貝で構成され、スズキ・クロダイ、カニ類、コウイカ類、キジ、イノシシ、ニホンジカ、ノウサギ、イルカ類なども出土しており、当時の生活や環境を知る上での貴重な手掛かりとなっている。また、海神中学校の西側に隣接する第３次調査地点からは、貝塚の下の墓坑から抱き合うように埋葬された２体の人骨が発見された。平地の遺跡としては今のところ日本最古級の合葬（がっそう）例の１つである。

縄文時代早期以外にも、旧石器時代の遺物散布地、縄文時代前期後半及び古墳時代後期～古代の集落跡が発見されており、この地が生活環境に恵まれていたことをうかがい知ることができる。第３次調査地点は公園として整備されている（2,323.34㎡）。また隣接地には飛ノ台史跡公園博物館があり、飛ノ台貝塚をはじめとする市内の縄文時代の遺跡から出土した遺物などが展示されている。

（案内）

東武アーバンパークライン新船橋駅下車徒歩約８分。

京成電鉄海神駅から徒歩約13分。

東葉高速鉄道東海神駅から徒歩約15分。

（問い合わせ先）飛ノ台史跡公園博物館

船橋市海神４－２７－２

TEL ０４７－４９５－１３２５

下野牧二和野馬土手

しもの まき ふたわの まどて

所在地　船橋市二和東１丁目３６７番１８他

所有者　個人

野馬土手は、江戸時代に、江戸幕府が設置した馬の放牧場にかかわる史跡である。

千葉県北部に広がる下総台地上には、小金牧(5つの牧場の総称)、佐倉牧(7つの牧場の総称)と呼ばれていた広大な馬の放牧場があった。市域には、小金牧の一つ、下野牧があった。

下野牧は、現在の千葉市花見川団地付近から船橋市咲が丘まで、ちょうど船橋市中央部を縦断するように続く広大な牧であった。

牧には、野馬と呼ばれる放し飼いの馬がおり、牧の周りや内側には土手が築かれていた。土手には牧から馬が出ないように牧と村の境に築かれた土手や野馬を定期的に捕獲するため牧内に設けられた区切りの土手があった。寛政期(1789~1800年)に、牧の周りに築かれた土手は総延長19488間(約35.４km)、牧内に区切りとして築かれた土手は4020間(約7.3km)あった。二和小学校南側の野馬土手は、牧内に区切りとして築かれた土手で、所々、途切れているが、東西に一直線の約490mの土手が現存している。道路面からの高さは高いところで2m以上あり、市内では比較的に良好な状態を保っている土手の一つである。

下野牧の範囲

(案内)

JR船橋駅から三咲駅経由鎌ケ谷大仏・小室行きバスで二和小学校下車徒歩約3分。

新京成電鉄滝不動駅徒歩約10分

葛飾神社のクロマツ

所在地　船橋市西船５丁目３番８号

所有者　葛飾神社

『江戸名所図会』長谷川雪堤図

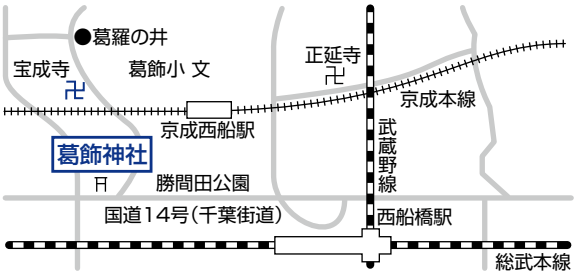
葛飾神社本殿を囲む玉垣の中に聳え立ち、幹が二又に分かれている。枝が社殿を覆うように笠状に伸長しており、南側から眺める姿は、社殿と一体化しているような美しい景色を成している。樹高は13ｍ、幹回りは3.42ｍ、葉張りは16.5ｍで、市内では最も太いクロマツである。

江戸時代の『江戸名所図会』（天保7年（1836）刊）には「勝間田の池（現勝間田公園）」の脇にある熊野宮のクロマツが描かれている。この「勝間田の池」は、古来和歌の名所であった「勝間田池」になぞらえたものであった（万葉集等に詠まれた勝間田池は、薬師寺の近くにある）。地元ではこのクロマツの樹齢は約400年と言われており、こうしたことからも古くから親しまれていたことがわかる。

※熊野神社は大正3年（1914）に葛羅の井（55頁参照）の西の地にあった葛飾神社に合祀され、村社葛飾神社と改称して、現在に至っている。

（案内）

ＪＲ西船橋駅から徒歩約８分または
京成西船駅から徒歩約６分。



二宮神社のイチョウ

所在地　船橋市三山五丁目20番1号
所有者　二宮神社

「三山明神」『成田参詣記』（長谷川雪堤画）

すらりとした感じの巨木であるが、太さは市内最大級であり、市内で最も高いイチョウである。樹高は25ｍ、幹回りは4.71ｍ、葉張りは17.4ｍの雌株である。

二宮神社正面の鳥居からいったん参道を下り、再び階段を上がると社殿を背景としてイチョウが大きく聳え、境内の良い景色になっている。また神社境内には鬱蒼とした多くの種類の叢林があり、こうした貴重な自然環境によって守られている。

このイチョウは江戸時代安政5年（1858）に刊行された『成田参詣記』（中路定俊、中路定得著）の「三山明神（二宮神社）の図　長谷川雪堤画」に描かれているなど、古くから人々に親しまれており、また御神木として崇められている。地元では、樹齢約400年と言われている。

（案内）

JR津田沼駅北口から二宮神社行きバスで終点下車。

東葉高等学校正門（旧近藤家住宅長屋門）

所在地　船橋市飯山満町２丁目670番１

所有者　学校法人船橋学園

この長屋門は上飯山満村の旧家近藤四郎左衛門家の屋敷の門として使われていたものである。

近藤四郎左衛門家は、江戸時代に複数の旗本の知行地と幕府の直轄地にわかれ、それぞれに名主のいた上飯山満村において、名主総代を務めていた豪農で、江戸時代末期には、同村に接していた小金下野牧とよばれた幕府の牧場の牧士にも任じられている。

牧士は幕府の役人の配下として、牧場の維持管理を任せられ、乗馬・帯刀などを許される農村においては最も身分の高い存在であったという。

門の規模は桁行11間2尺（約20.6ｍ）、梁行2間半（約4.5ｍ）を測る長大なもので、腰は籔子下見、上部を白漆喰塗とし、正面と背面にせがいをつけ、桟瓦葺の寄棟屋根を載せている。築造年代がわかるものは残されていないが、造りなどから明治時代中期頃に建てられたと推定される。

東葉高等学校が近藤家の屋敷跡に建設されるのにあわせて修復され、現在、「東葉門」の名称で同校の正門として活用されている。

国・登録文化財制度　ミニ知識

文化財登録制度は、文化財建造物を守り地域の資産として活かすため、平成８年に誕生した国の制度である。

50年を経過した貴重な歴史的建造物を登録有形文化財に登録し、様々なかたちで活用しながら保存していくことができる。

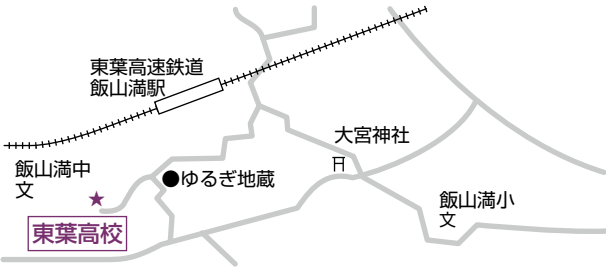
（案内）

東葉高速鉄道飯山満駅から徒歩約10分。

見学する際は事前の連絡が必要です。

（連絡先）東葉高等学校

TEL ０４７－４６３－２１１１



船橋市の歴史

原　始

小室上台遺跡出土の土偶
（縄文時代早期）
飛ノ台史跡公園博物館蔵

船橋市内では約３万年前の後期旧石器時代初頭の石器類が印内台遺跡群から発見されていることから、この頃には市内に人が生活していたようである。

市内で発見されている旧石器時代の主な遺跡として、行田の向遺跡・二和西の西ノ台遺跡・藤原の八人割遺跡がある。

縄文時代は土器が出現した約１万６千年前から始まる時代で、古い方から草創期・早期・前期・中期・後期・晩期に分けられており、市内では早期以降の各時期の遺跡が発見されている。早期には、市内で初の国史跡となった飯山満町・米ケ崎町にある取掛西貝塚をはじめ、市史跡となっている海神の飛ノ台貝塚や小室町の小室上台遺跡など、前期には新高根の古和田台遺跡・芝山の飯山満東遺跡など、中期には西習志野の高根木戸遺跡・大穴南の海老ヶ作貝塚・飯山満町の上ホシ遺跡など、後期には東船橋の宮本台貝塚・古作の古作貝塚など、晩期には豊富町の金堀台遺跡などがある。

遺跡の発掘調査現場（取掛西貝塚(5)）

弥生時代は紀元前４世紀頃から紀元３世紀中頃まで続く時代で、縄文時代末期に大陸から伝来した金属器と水田農業が各地に普及していった時代である。弥生時代は前期・中期・後期に分けられ、市内では中期・後期の集落跡が発見されており、主な遺跡として、夏見の夏見大塚遺跡・夏見台遺跡、金杉の立場遺跡、取掛西貝塚などがある。

古　代

３世紀後半に西日本を中心に前方後円墳が造成されるようになり、以後７世紀末頃までを古墳時代と呼ぶ。

市内には古墳はほとんど見られないが、元々古墳がなかったという訳ではなく、農耕や開発によって削平されてしまったと推定される。一方、古墳時代の集落跡は数多く発見されおり、二和西の西の台遺跡、夏見台遺跡、小室町の白井先Ｄ地点遺跡、田喜野井の外原遺跡、西船・海神の海神台西遺跡などがある。

奈良時代になると、中国の制度を取り入れて律令制による国づくりが始まり、市域北部は下総国印旛郡、南部は下総国葛飾郡に編入された。奈良・平安時代には、現在の市川市国府台に国府が置かれたこともあり、市を代表する古代集落である東中山台遺跡群や印内台遺跡群、夏見台遺跡群などが、大いに発展した。これらの遺跡からは、和同開珎をはじめ皇朝十二銭や都で使われた土器などが出土し、都との交流が窺える。

平安時代になると市域にかかわる記事のある文献が登場する。『日本三代実録』に「下総国意富比神」の名が３度出ており、初出は貞観5年（863）の記事である。この意富比神は意富比神社（船橋大神宮）の前身と推定されている。平安時代後期の保延4年（1138）には、夏見周辺が伊勢神宮の荘園とされた。この荘園は夏見御厨あるいは船橋御厨と呼ばれ、伊勢神宮へ白布などを納めていた。

印内台遺跡群出土和鏡
（左）水草双雀鏡（平安時代）　（右）俵藤太鏡（南北朝時代）
船橋市郷土資料館蔵

中　世

鎌倉時代の船橋地方は、千葉氏の勢力下に置かれることが多かったと推定される。千葉氏は鎌倉幕府樹立に功績のあった常胤以来、下総の守護として勢力をふるった。

船橋に関する記録としては、『吾妻鏡』の文治2年（1186）の記事に「院御領船橋御厨」の言葉がある。前記の御厨が一時、後白河院領になったことを示すものといわれる。

天台密教のある文献には、文保元年（1317）に船橋に安養寺という寺院があった旨の記事がある。

また、『中山法華経寺文書』の元徳3年（1331）の文書には、千葉胤貞が古牟呂（小室）村内の所領を同寺に寄進する旨記されている。

鎌倉時代の遺物としては、板碑が6基と宮本西福寺の五輪塔・宝篋印塔が知られている。

南北朝・室町時代の記録には、船橋が海上交通の一拠点であったことを示すものがいくつか残されている。

室町時代後期（戦国時代）には、市域に十数ヶ所に上る城館があったと考えられ、現在も高根城跡・夏見城跡・小野田城跡・金杉城跡・楠ヶ山館跡には土塁や堀などの遺構が残っている。また近年は東中山台遺跡群などで、中世の大規模屋敷跡と思われる遺構が確認されている。戦国時代の土豪としては、夏見に豊島勘解由左衛門尉胤定という者がいた以外、確実な人物は知られていない。

高根城跡の空堀

近　世

豊臣秀吉の後北条氏征討後、徳川家康が江戸に移され、船橋地方はその支配下に置かれた。その後家康は政権を握り、子孫は将軍として君臨した。家康～家光時代に市域西部一帯は、大名成瀬氏の領地となっていた。

しかし、市域の大半は幕府代官支配地と旗本の知行地で、複雑な分割支配の村もあった。

江戸時代の当地方の中心は船橋と呼ばれた五日市村・九日市村・海神村で、交通業務を行う継場（宿場）・商業地区・漁業地区を含む繁華な地域であった。継場地区には江戸後期には29軒の旅籠があり、また幕府公用旅行者や、大名の泊まる本陣が1軒あった。

江戸時代の市域には40余りの村があったが、大半は江戸以前から続く水田農業を主とし、畑作も行う村であった。また、市域中央の台地の多くは幕府の馬の放牧場で、馬が放し飼いになっていた。延宝年間（1670年代）にその牧場の一部と周辺が開墾され、神保新田・滝台新田・前原新田・丸山新田・上山新田・藤原新田・行田新田の畑作農村が成立した。さらに、享保7年（1722）に牧場の一部が幕府薬草園とされたが、その後廃されて薬園台新田となった。

江戸後期になると、市域西部の村や宿場近隣では、商品作物や果樹の栽培が行われるようになった。また西海神浜では塩田による塩業が行われた。

野馬捕りの光景『成田参詣記』

近　代

慶応（けいおう）４年（1868）の戊辰戦争（ぼしんせんそう）の局地戦が船橋・市川・鎌ヶ谷で起こり、戦火で船橋の中心街は大半が焼失した。

明治２年（1869）に下総の旧幕府牧の開墾が始まり、市域では二和・三咲の農村が開かれた。一方、市域東部の牧場と周辺台地は、明治６年（1873）の近衛兵の演習を契機に、陸軍習志野原演習場として整備されていった。

大正時代の船橋の塩田　三田浜塩田

明治の地方制度の下で、市域は２年に葛飾県、４年に印旛県の管轄とされ、６年に千葉県が成立するとその管轄となった。やがて明治22年（1889）に町村制が実施されると、市域は東葛飾郡船橋町・葛飾村・八栄村・法典村・塚田村、千葉郡二宮村・豊富村に統合された。

明治27年（1894）に私鉄の総武鉄道が市川～佐倉間に開通し、船橋駅が開設された。30年（1897）には本所（錦糸町）～銚子まで延長され、成田線へも接続された。40年（1907）には千葉までの複線化と国有化がなされた。この鉄道開通により、船橋は宿場町から商業町へと転換を始めた。

近代の産業は、市域全体でみると農業を主とする集落が依然多数を占めていた。その内鉄道沿線では野菜類の栽培が盛んとなっていった。水産業は明治前期と末期に鰯の大漁で賑わい、また明治30年代からは海苔の養殖が始まった。さらに塩業は、明治以後は船橋浜でも始められ、明治後期～大正前期にはかなりの生産量を上げた。

工業は明治期には貝灰（白壁の材料）の製造があり、大正期には胡粉（下地塗料等の材料）製造や魚介類・農産物の加工工場が増加した。関東大震災後には金属工業も起こったが、小規模であった。

大正５年（1916）に、京成電気軌道（京成電鉄）が船橋まで延長され、12年（1923）には北総鉄道（昭和19年東武鉄道に合併）が船橋～柏間に開通した。

昭和に入ると、7年（1932）に総武線が御茶ノ水まで延長され、10年には千葉までの電化が完成した。それらの交通機関の発達に伴い、船橋町や葛飾町（昭和6年町制）では人口が増加した。そのため２町と近隣３村が合併し、12年（1937）4月1日に船橋市が誕生した。当時は人口約４万３千、面積約40平方キロであった。

戦時中の船橋には、東京から軍需工場が移転し、またほとんど空襲の被害がなかったので、人口増加の傾向が継続した。

昭和初期の本町通り

現　代

戦後間もなく、当時は二宮町（昭和３町制）域であった習志野原の開墾が始まったが、翌年にはその一部が進駐軍に接収された。

昭和22年（1947）に新京成電鉄が新津田沼駅～薬園台駅間に開通し、24年（1949）に鎌ヶ谷大仏駅まで延長され、30年（1955）に松戸まで全線開通した。28年（1953）に二宮町、29年（1954）に豊富村が船橋市に合併され、市の面積が倍増した。

30年代に入ると、市域の人口は大幅な増加を始めた。25年（1950）に10万であった現市域人口は39年（1964）に20万、44年（1969）に30万、49年（1974）に40万と急増を遂げた。人口の急激な増加は50年代からはやや鎮静化したが、58年（1983）には50万、平成21年（2009）には60万人を突破した。

市制施行を祝う新聞号外

この人口増加の最大の要因である交通機関の拡充は、44年の地下鉄東西線の西船橋駅までの延長に始まり、47年（1972）の総武快速線の開通、53年（1978）の武蔵野線の西船橋駅までの延長、54年（1979）の北総開発鉄道北初富駅～小室駅間の開通、61年（1986）の京葉線西船橋駅～千葉みなと駅間の開通、平成２年（1990）の東京駅乗り入れと続き、平成８年（1996）には東葉高速鉄道（西船橋駅～勝田台駅）が開通した。

現代の産業は、農業は農地の宅地化が進み耕地面積が半減したが、都市農業として野菜・果樹栽培に活路を見い出している。水産業は昭和30年代～40年代前半に魚介・海苔とも高い生産量を上げた。その後、埋め立てと海水の汚染で漁獲量が減り、転業者が続出した。しかし、漁具の進歩・汚染の改善などで、船橋浦は奥内湾唯一の本格的漁業地の地位を保っている。

工業は戦後10年近く軽工業（食品加工など）が中心であったが、昭和30年代からは埋め立てにより工場敷地の造成が行われ、大規模な工場の操業が始まった。商業は昭和40年代以降、船橋駅・津田沼駅周辺に大型店舗が進出し、また、ららぽーとの開業などで、県内有数の商業都市となった。

平成15年（2003）４月には「中核市」に移行し、平成21年（2009）9月には人口60万人を超え、首都圏有数の都市として発展を続けている。

『船橋』の地名の由来

九日市・五日市・海神は昔から「船橋」と呼ばれている。この地名の由来についてははっきりわからないが、次のような伝説が有名である。その昔、景行天皇とその皇子である日本武尊がこの地を訪れた際に、地元の人々が海老川に舟を並べて橋をつくり、一行をお通ししたという伝承がある。日本各地に「船橋」という地名はおおよそ50ヶ所残っている。「船」も「橋」も川に関連した言葉である。

船橋市の略年表

時代	西暦	年号	船橋地域の出来事など	日本の出来事など
旧石器時代	30000年前頃		印内台遺跡群	
			西の台遺跡・八人割遺跡・向遺跡・源七山遺跡	
縄文時代	BC14000頃	（草創期）		
	BC 9500頃	（早　期）	取掛西貝塚・飛ノ台貝塚・佐倉道南遺跡・小室上台遺跡	
	BC 5200頃	（前　期）	法蓮寺山貝塚・八栄北遺跡・飯山満東遺跡	
	BC 3500頃	（中　期）	海老ヶ作貝塚・高根木戸遺跡・高根木戸北貝塚	
	BC 2500頃	（後　期）	藤原観音堂貝塚・宮本台貝塚・古作貝塚	
	BC 1300頃	（晩　期）	金堀台貝塚	
	BC　400頃	（前　期）		
弥生時代		（中　期）	取掛西貝塚	
		（後　期）	夏見大塚遺跡・夏見台遺跡・立場遺跡・台畑遺跡	
古墳時代	AD　250頃	（前　期）	西の台遺跡・辺田台遺跡	
		（中　期）	外原遺跡・柏上遺跡・白井先Ｄ地点遺跡	
		（後　期）	夏見台遺跡群・印内台遺跡群・海神台西遺跡・東中山台遺跡群	
飛鳥時代	538			仏教伝来（552年説もある）
	645	大化 1		大化の改新
	700頃		律令制で下総国葛飾郡に属する。	
			市川に下総の国府がおかれた。	
奈良時代	710	和銅 5		平城京に都を移す。
平安時代	794	延暦13		平安京に都を移す。
	863	貞観 5	『日本三代実録』に「下総国意富比神」の名がみえる。	
	927	延長 5	『延喜式』に「意富比神社」の記載がある。	
	935	承平 5	『倭名類聚抄』の郷名に「栗原」の名が出ている。	平将門が反乱をおこす。（～40）
	1138	保延 4	夏見周辺が伊勢神宮の荘園になった。	
	1186	文治 2	『吾妻鏡』に「船橋御厨」の名が出ている。	
鎌倉時代	1192	建久 3		源頼朝、征夷大将軍となる。
	1274	文永11		元軍が襲来（文永の役）
	1281	弘安 4		〃　（弘安の役）
	1286	弘安 9	同年号の板碑が大神保西福寺に残る。	
	1331	元弘 1	『中山法華経寺文書』に「古牟呂村」（小室）の名がみえる。	
南北朝時代	1333			鎌倉幕府が滅びる。
室町時代	1345	康永 4	同年号の板碑が残る。	
	1467	応仁 1		応仁の乱がおこる。（～77）
	1538	天文 7	後北条氏と里見氏が国府台で戦う。	
	1564	永禄 7	〃	
	1570頃		高城氏の勢力下となった。	
安土・桃山時代	1590	天正18	徳川家康が関東に移封され、市西部は成瀬氏の領地となった。	豊臣秀吉が全国を統一する。
	1600	慶長 5		関ヶ原の戦い
江戸時代	1603	慶長 8		徳川家康が江戸幕府を開く。
	1614	慶長19	御成街道（東金街道）が造成された。	
	1615	元和 1	徳川家康一行が船橋御殿に宿泊した。	大坂夏の陣で豊臣氏が滅亡。
	1673頃	延宝年間	藤原・上山・行田・丸山・前原・滝台・神保の新田が開墾された。	
	1703	元禄16	大地震により、船橋浦では海底の地形が変わったという。	
	1721	享保 6	幕府の大砲試射場で大砲の試射が行われた。	
	1722	享保 7	下総薬草園が開かれた。（後の薬園台）	

時代	西暦	年号	船橋地域の出来事など	日本の出来事など
江戸時代	1725	享保10	小金原で将軍家御鹿狩り。（後に３回行われた）	
	1785頃	天明年間	西海神浜で塩業が本格化。	
	1824	文政 7	漁場争いが起き、その後漁師総代が牢死した。	
	1853	嘉永 6		ペリーが浦賀に来航する。
近代	1868	明治 1	船橋大神宮周辺・海神などで官軍と幕府方脱走兵の戦闘がある。戦火により船橋宿の大半が焼失。	
	1869	明治 2	二和・三咲の開墾が始まる。 現市域の大部分が葛飾県の管轄となった。	版籍奉還
	1871	明治 4	現市域は印旛県の管轄となった。	廃藩置県
	1872	明治 5	船橋小学校が開校した。	学制公布
	1873	明治 6	明治天皇が大和田原で近衛兵の演習を統監された。 千葉県が誕生した。	地租改正条例公布
	1877	明治10		西南戦争がおこる。
	1889	明治22	市制・町村制が施行され、現市域は１町６村となった。	大日本帝国憲法発布
	1894	明治27	総武鉄道が開通し、船橋駅ができた。	日清戦争がおこる。（～ 95）
	1901	明治34	船橋沖で海苔の養殖が本格的に始まった。	
	1904	明治37		日露戦争がおこる。（～ 05）
	1914	大正 3		第一次世界大戦（～ 18）
	1915	大正 4	行田に海軍の無線電信所ができた。	
	1916	大正 5	京成電気軌道が船橋駅まで延長された。	
	1917	大正 6	高潮で大きな被害を受ける。	
	1923	大正12	北総鉄道が船橋駅～柏駅間に開通した。	関東大震災がおこる。
現代	1925	大正14		普通選挙法公布
	1937	昭和12	２町３村が合併し、船橋市が誕生した。	
	1939	昭和14		第二次世界大戦（～ 45）
	1946	昭和21		日本国憲法公布
	1947	昭和22	新京成電鉄が新津田沼駅～薬園台駅間に開通する。	
	1953	昭和28	二宮町が合併された。	
	1954	昭和29	豊富村が合併された。	
	1955	昭和30	新京成電鉄が松戸まで全線開通した。 船橋ヘルスセンターが営業開始した。（昭和55年営業休止）	
	1956	昭和31	大規模な埋立てが始まった。	
	1960	昭和35	京葉道路が海神まで開通した。 住宅公団前原団地の入居が開始された。 本町・宮本町通商店街中高層化事業着工	
	1964	昭和39		オリンピック東京大会開催
	1969	昭和44	中央卸売市場が開場した。 東西線が西船橋駅まで延長された。	
	1972	昭和47	総武快速線が開通した。	
	1978	昭和53	武蔵野線が西船橋駅まで延長された。	
	1979	昭和54	北総開発鉄道が小室駅～北初富駅間に開通した。	
	1981	昭和56	ららぽーとがオープンした。	
	1983	昭和58	人口が50万人を超えた。	
	1986	昭和61	京葉線が西船橋駅～千葉みなと駅間に開通した。	
	1996	平成 8	東葉高速鉄道が西船橋駅～勝田台駅間に開通した。	
	2003	平成15	船橋市が中核市となる。	
	2009	平成21	人口が60万人を超えた。	
	2011	平成23		東日本大震災がおこる
	2020	令和 2		新型コロナウイルス感染拡大（～ 23）
	2021	令和 3	取掛西貝塚、国史跡に指定された。	東京オリンピック・パラリンピック競技大会開催

船橋市の文化財

発行日　令和5年3月31日
発行者　船橋市教育委員会
千葉県船橋市湊町2－10－25
編集者　船橋市教育委員会文化課
印刷所　株式会社 総合印刷新報社